

# 河川の学習機能に関する研究

—多摩川及び横浜市内河川における子どもたちの活動をケーススタディとして—

1 9 9 1 年

並 木 直 美

よこはまかわを考える会

# 目 次

はじめに	1
I 子ども学概論	久保田 正男
ー川から発想する子ども学ー	
1. 発想の原点としての川	5
2. 子どもの川認識の過程	12
3. 子ども世界の構築	24
4. 子ども会議の方法論	33
(参考)	42
II 都市河川の学習効果	松下 希一
ーよみがえる水辺で野鳥や水質を調べてー	
1. はじめに	47
2. 活動の経過	47
3. 観察された鳥たち	48
4. 活動の内容	49
5. 川の学習効果について	50
(参考)	52

## は じ め に

川のあるまちづくりをめざして、大岡川クリーンフェスティバル（河川清掃＋イベント）を地域と一緒にはじめた際、子ども達にどぶ川をそうじした感想を聞いたことがある。返ってきたのは、「川そうじは面白い。でもおじさん達、なんで川をきれいにするの？川なんか埋めてローラースケート場にしたい方がよいのに……」という反問である。まわりの子どももうなづき顔であった。私達大人の間では、川そうじは誰がやるか、役所か住民か、やるとすればどのようなやり方がよいか議論の中心であり、川をきれいにすること、そしてそのために川そうじをやることは当然事であり前提であった。しかし、子ども達には「川をきれいにする」という大人達に当たりまえのことが当たりまえとなっていない、カルチャーショックであった。

また、「21世紀のわたしたちのまち」というテーマで、子ども達と絵本づくりを試みたことがある。川のパートでは、第1週（土曜日の午後）は専門家による川の歴史や水質の話、第2週は川歩き、第3週は古老や農家の人の話、そして4週目に各自にB4の絵を持ってきてもらったのであるが、全員（6人）が昔や今の川の姿の絵であり、夢のある絵がなく絵本づくりに失敗したことがある。子ども達に、川であれをしたい、これをしたいといった欲求がなく、川に夢がもてないのであった。

家庭や学校から川に遊びに行くことを禁止され、川はどぶ川で子どもの背より高い柵があり、「あぶない、近よるな」の看板もある。きれいな川でも、「よい子はここで遊ばない」といった看板が立てられている。子ども達は、川で遊んだ経験がなく、川がすばらしい所、おもしろい所だということを知らない（知らされない）でいる。むしろ、危ない所、きたない所というイメージが刻み込まれているといってもよい。

川体験をもつ私達の世代には、川風景に雨が降ればこわいこともあるが、ふだんは楽しくおもしろい所という風景が刻印されているが、川体験のない子ども達の世代ではその反対となっている。そして、その川体験のあるなしが「なぜ川をきれいにするの？」という疑問になってあらわれているように思われる。

ところで、河川浄化は、“河清百年をまつ”は大げさとしても、世代間にわたる息の長いムーブメントが必要である。

私たちはややもすると、川を汚したのは私たちの時代であり、私たち世代が浄化して、きれいな川を次世代に残すのが責務であると考えがちである。しかし、河川浄化に年月のかかること、川体験の有無によって川への想いを変えることを考えると、河川浄化に取組むと同時に、次世代に川をきれいにしたいという“こころ”をつくってゆくことも重要なのではないかと思われる。

その“こころ”づくりにおいて、実際に川をフィールドとした環境学習が大きな役割をもつものと思われる。言いかえれば、学校の教室や教師以上に、河川は環境学習機能をもっていると思われる。

しかし、その河川の環境学習機能を引き出すには、それなりの学習方法の開発が必要である。このたび、

助成を得てその調査研究に取り組んだのであるが、短期間のこともあり、学習方法のプログラム化までに至らなかったが、それなりの成果は得たように思う。

以下、その成果をⅠ、子ども学概論 —— 川から発想する子ども学 —— 、久保田正男。Ⅱ、都市河川の学習効果 —— よみがえる水辺で野鳥や水質を調べて —— 松下希一としてまとめたので報告します。

# I 子ども学 概論

—川から発想する子ども学—

久保田 正 男

鶴見川子ども発見団

# 子ども学 概論

— 川から発想する子ども学 —

鶴見川子ども発見団  
久保田正男

家の近くを流れる川を見るたびに、あるいはどこかの町へ出掛けて行ってとても美しい川と出会ったとき、『この川は、どこから流れてきて、どこへ流れていくのだろう』と思うときがある。実際、この疑問を単純に行動に移しさえすれば、本論の起稿のねらいは、我が意の如く自然に達成されるものである。敢えてここに記すのは、これまでの川歩きの実践からその行動に意味づけをし、指導者には活動の理解と推進を願ひ、子どもたちには活動の方向を示したいと考えたからである。

本論の展開は、次の通りである。

1. 発想の原点としての川
2. 子どもの川認識の過程
3. 子ども世界の構築
4. 子ども会議の方法論

## 1. 発想の原点としての川

15年近く前の話である。神奈川県神奈川区の神橋小学校で教えていた頃のことである。近くに5km足らずの小川『滝の川』が流れていた。興味をもった子どもたちが中心になって、学級会で『この川を調べてみよう』という提案がなされた。ここでは、その調査報告書『滝の川調査記録』(S53.3.22-5年生)の一部を抜粋し紹介したいと思う。

《調査目的》 滝の川を『私の滝の川』にするために研究します。

昔、川は、人々の生活、生物の生活と共にあったはずであり、それぞれが川と密接な関係を持っていた。

しかし、今日、それは分離された存在であり、川は『はきだめ的存在』といってもいいだろう。

そこで、私たちは、『川をきれいにしましょう!』と、きれいごとをさげふ前に、川を多角的な方面からとらえ、まず川を私たちの側からながめる姿勢で迫り、自らに負わされた責務ということから川をきれいにしていかなければならないということを実感

しなければならない。それこそが、真に人々に訴える力を生み出すものといえる。私たちが学ぶということの真の意味も、そんなところにあるのだろう。

《調査方法》 S52. 1. 15 実際に歩き、その結果から問題提起する。

(1) 問題提起された事柄

- ①橋について着目して調べよう（川の位置を調べる手がかり）
  - ・竣工年月日 ・様式 ・大きさ ・川幅 ・水の深さ
  - ・水の濁り ・流れの速さ ・隣接家屋の川の利用率
  - ・河口の船舶利用状況
- ②周囲の風景にも注意しよう（今現在をしっかりと見ておく）
  - ・家並み ・道路 ・地勢
- ③生物分布は聞き込みを中心に調査しよう
- ④昔と今の生活変化
  - ・S50年レポートとも比較する
- ⑤公共施設の利用、そこから出されている資料等の活用をはかり、データに具体性と客観性を持たせていこう
- ⑥今後の予想、川のあり方、自分たちの意識の持ち方についても記録していこう

(2) 河川の区分と調査班編成

第1区分	N01～N011橋 / 古沢他	4名
第2区分	N012～N022橋 / 小林他	3名
第3区分	N023～N029橋 / 村山他	7名
第4区分	N030～N038橋 / 古谷他	7名
第5区分	N039～水源 / 土川他	4名

《調査結果——部》

- N01 万代橋 完成年月日不明 長さ43.5m 水面からの高さ7m。  
中央市場入り口。親柱には、どうろうのようなものが付いている。相当古い橋である。
- N02 幸橋 S. 34.3完成 川幅20m 水面からの高さ7m  
水の流れが感じられない。ごみもかなり多い。ここは、下見のときも工事をやっていた。現在は、幸橋拡張工事に伴い、床版コンクリート養生のため、全面交通止めになっている。

(中略)

水源地 片倉の中央を通っている道路を横切ると、急に川の水が少なくなったことに驚かされる。写真で分かるように、手前はチョロチョロと流れている。その先は地下を通っているの、さらに先に行って

みると、次の写真のように十分に流れている。このことから、この辺りは、一度二又に分かれ、また一緒になっているらしいことが分かった。

地図では、この辺りで川は終わっているはずなのだが、水が大分あったので、近所の人に聞いてみると、『この川は、この道（写真No16～18）をまっすぐ行くと、うさぎ山というのがあって、そのこの畑の真ん中から出ていて、源は野菜の洗い場で、源からここまでの間は地下で、この辺りの下水道ともつながっているんです』と、語ってくれた。

行ってみると、No19,20の写真のところが、それをたどっていくと、No21,23のような写真のところが、No23の写真のところが源で、その底を撮ったのがNo24の写真だ。水が盛り上がっているところが写るか初めは心配だったが、幸い写っていた。水の底に所々盛り上がっているのが見えるが、これが湧水で、そこから水が湧き出していた。足が滑って、ちょっと傘を入れてみると、どんどん傘がもぐっていくので、あわてて態勢をたて直して傘を抜いた。

水源地の形 円形。直径約1.9m、深さ10cm程度。すごい威力で吹き出している。こんなに自然の水が勢いよく吹き出している様子は初めて見た。

#### 《その他調査に関わる記録の一部》

5年—武藤英明の記録から

12月25日 私は1時30分に、関口、西山、川又君たちと滝の川調査をした。その内容は、ごく初歩的なものであったが、みんなそれを大きなものとして喜んでいる。川岸を通りがかる人は、川の汚さを不思議がるよりも、調査する私たちをめずらしがっているのが印象に残っている。

1月12日 滝の川調査もあと一步で完成だ。だが、これは完成させるのではなくて、今が始点であると、私は思うのである。なぜならば、こんな調査はやるだけでは何もならないからと思うからであり、みんなが関心を持ってくれなければ何もならないのである。この日記を通してこう語りたい、『自然を破壊するな』と。

5年—土川剛史のまとめの感想・日記から

もうすぐこの調査を終えるが、これを完成させることによって、何というか、川の神秘、人々の暮しみたいなものが伝わってきた。それにしても、私の仲間はよくやってくれた。私の気付かぬこともそれとなくやっておいてくれたり、私が書き落としたメモもちゃんとして書いておいてくれたということがしばしばあった。みんなは、私



がいなくてもこの調査を完成させたであろう。そんな仲間に、私は心から感謝する。

区役所や市役所に行っても、ごみを捨てる人が多くて困るときかんに言っていた。この調査を完成させたなら川に対する見方が変わってくるかもしれない。いや、変わると断言出来るだろう。

1月15日

カモメとハトが飛び、流れる川の横を私たちは歩いてきた。何やら橋の名前をしきりに見ている。そして、また歩き出した。

私たちは海に出た。海面がキラキラ光り、船の音が聞こえた。私たちの胸は弾んだ。潮のにおいが私たちを包む。太陽がしきりに海を照らす。私は、そんな光景に心を奪われていた。そんな中をみな歩いた。

河口付近では、川のうえをハトが行ったり来たり、カモメが白い羽根を羽ばたかせている。この光景を、私はよく見た。やがて、川幅も狭くなり、鳥もいなくなったころ、第1日目の調査も終わりにかけていた。

以上が、その報告の一部である。

調査目的は、実際には調査の最後に、私の助言を加えて修正を加えたが、一連の活動の過程は、現在の私たちの川調べの目的、『川から発想する原点』を明確に提示しているのではないだろうか。

水をこんこんと湧き出す小さな水源があり、外国船の停泊する河口の岸壁もある。わずか数キロとはいえ、田園→住宅・商店街→工場地帯と姿を変える町並、調べながら、鳥を追い、コンクリート護岸に生きる草木・昆虫を発見する。地元の住民とのインタビューから我が町の歴史、語る人間の考え方・生き方を知った。それも全てが感動的な出会いと発見によってである。

しかも、『臭い・汚い川だと思っていたのに、本当にその通りだ』

『臭い・汚い川だと思っていたのに、ここにも生き物が生息している』という冷静な現実直視によって得られた態度は、引用した記事にあるように『川調べをしていたら、橋を通る人たちは、川の汚れよりも僕たちのほうを珍しがっていた』とする人間の意識のありようにまで立ち入ろうとする。従って、川の再生は、ポスターの標語でしかない『川を汚さないようにしよう』『ゴミを捨てないようにしよう』を超えて、『私の川』意識を万人に求め、自らそのよき変革者ならんとする。私が川に着目したのは、ここにある。

川は水源から河口を目指せば、必ず海に至る。河口から水源を目指せば、幾本もの

支流があつて、我々の目指す水源が何処なのかたちまちあやふやとなる。単純にして複雑、多岐にして一筋の道。人生を川の流りに例えたものがあるように、川歩きは、そつとその人生の何たるかをつかみとるかのようなものである。

『発見団員』にとって、あらゆることが自分にとっての『発見』である。川の現実を知ることも発見、インタビューを通して知った人間も発見、その人間を通して知った川もまた発見。疲れて歩けなくなったとき知る己の体力の無さも発見。そんな自分が、川の現実を前にして何かを始めたくなる、川は向かえば、必然的に私たちに課題を与えてくれるものである。

水流は千変万化、毎日直面する川は、その顔を変える。だから会いたくなる。だから知りたいと思う。上流、中流、下流の水域ごとに変貌する自然の形態、流域ごとに特色ある形で営まれる人々の生活、継承されてきた文化。川そのものの存在は、上中下流を結ぶネットワーク。あらゆる方面の研究素材がそこにある。

滝の川に話を戻す。この川は、現在1kmにも満たない川となった。殆どが埋め立てられ、暗渠化されてしまったのである。この『事件』は、この川調べと大体同じ時期に、市内の中小の河川に進行していた出来事でもあったのである。私も子どもたちも当時、この面での認識はなく、予見すらできなかった。実際、埋め立てられてしまった滝の川を眼前にすると、今川にこだわらねばならないのは、当時の『私の川』意識の私自身の弱さと、川の運命を予見できないまま川を消滅させてしまった反省からである。子どもたちには優れた直観力・先見眼が備わっている。従って、子どもたちをまず川に誘ってほしい。そこから、全ては始まる。我々の役割は、子どもたちを川に近付け、彼らの発見を尊重すること、そして、『本来あつてほしい川のありよう』に近付けるべく子どもたちの力を結集の方向へと導くことである。鈍化した我々の感性では、川は蘇らない。川を汚した責任は、確かに大人にある。だから、私たちの責任で解決すべきではあるとする論は正論であろう。しかし、大人たちは加害者の側に依然留まっていることも事実である。私は、子どもたちにとっての川の存在を模索させて、その行動・声を結集して力としていくことが、今一番解決の端緒を開くものと確信しているが、どうであろうか。

川を発想の原点とする私の立場を述べてきたが、次に『川へ迫る視点』を明らかにしたいと思う。

多様な児童の発想は認める。川に対してどのような切り込み、調査研究・活動をしなくても自由である。ただ、前述の『本来あつてほしい川のありよう』は、子どもたちの直感の声として提起されたとしても、私たちレシーバーのアンテナの感度が鈍ければ

単に『感想』のレベルでとらえられ、私が滝の川の埋め立てに『無力』であったように何ら力とはなっていない。『川への視点』は、私の一つのとらえである。各人がこうした目安をもって望めば、子どもたちの発想をより生かす方法が見付かるものと思いたい。

## 川へ迫る視点

### ① 私たちの水防意識によって支えられている川にすること（根本意識）

生活圏を流域に持つ以上、安全第一は言うまでもないことである。従って、水防意識をもって生活することは、必要条件である。治水を他者に全面的に任せることは、安全性に対する放棄でしかない。雨が降るなかで、川の水が自宅の安全を脅かすか否か、自らの判断の範ちゅうに属する。川を見るとき、自らの生命に関わるものとして眺められるようにしたいものである。

### ② 風景としてとらえられる川にすること

私は目をつぶると、幼い日遊んだ小川『滝の川』、故郷の川『神代橋のある筑後川の』、旅したときの思いでの川『島原の掘割』など思い出す。川といえば大河川の名前を挙げるはずなのに、この印象はどこから来るのであろうか。

現代人の美意識は、自然を第一にしながらも、自然との調和ということ踏まえて評価することが強いことに起因するからである。『兔追いしかの山、小鮒釣りしかの川』と歌ってみたところで、原生林のなかの川とは違い、農民との密接な関係化されたところの川である。古くは農業用水管理ということや水運ということによって位置付けられた河川管理があり、そこに今私たちが『安心できる、心落ち着かせることのできる風景』を作ってきたのである。歴史的伝統のなかで淘汰され、日本の風景としての一つの独特の形を作るに至ったが故に、思い出に深く残る風景ともなったのである。私たちの指向する風景とは、伝統を受け継ぐ形のものであって、新奇な風景を求めるものであってはならないと考える。

美しいと、先ず感じられる川。文化性、快適性といわれるところの要素。長年に

わたって、水と親しみ、水面を眺望してきた人ならば、その基準を精選した形で所有していることであろう。

変化に富む河川形態の維持、周辺の土地・家屋・緑と河川空間の一体化等見すごすことのできないポイントである。

### ③イメージとして構想された川であること（住民意識の育成）

②③は、同じような内容ではあるが、②は受け手としてのイメージであり、川を前にしてとらえて見える風景を意味する。その風景を鋭敏な感性で、その本質的意味にまで子どもたちにとらえさせたい。③でふれたいのは、その風景を創出する側の問題であり、本質的意味と言うところのものである。

以前には、私自身、歴史的に見て、権力者によって軍事行政的に、いわば一つの強かな知性によって河川管理されたところの、全体計画のなかで位置付け構想された川ということ河川のあり方の重要な要素としてとらえていた。

①で述べた水防意識は、核として個人の意識である。自由な個にこだわる私は、ばらばら行政より、誤りの多い知性の方がより効果的に作用すると考えていた。確かに間違いではないと思われるが、多様な個、多様な顔の川が、一つにとらえられるわけではないのである。江戸時代の河川管理は、所轄の大名、官僚の手に余るところであった。むしろ独自の文化を形成していたところの村々に任せることで、衝突は度々あったが、全体としての調和は保たれていた。河川の維持管理が行き届いていたのである。

③で述べたいのは、文化形成しうる最小単位の自治体が、機能する技術をどのように獲得し、個性を發揮して川に絶えず働きかけているかを認めることを出発点とする。現状は、異なるが、これを視点として川を見ようとするのは、次代の担い手として子どもたちが、どのように自分たちの流域社会に関わっていけるかという点で、学ぶ場を提供することになるからである。

### ④生きている川にすること（共存共栄の考え）

小鳥にとっても、小魚やミミズにとっても生活を保証する場が必要である。また如何なる生物も食物連鎖の輪のなかにある。生きた緑があって、生きた川もあり、小魚が生きて、私たちの生活もある。そして、そのレベルは対等であるが、水・緑・小動物・生物全体を守るのは私たちである。

## ⑤子どもの目をもって川にせまること

大人社会は、利害が交錯する社会である。無論子ども社会においても同様ではあろうが、経済的効率という色眼鏡で見ることはいないし、川を汚染に手を染めてきたという過去もそう多くはない。この項の詳細は、次章以下に述べることとして、私は、上述のような単純な目安をもって、子どもたちにも接してきた。『ただ川を歩けばよし』とする話の発端からすると、冗長に過ぎたきらいはあるが、子どもたちの行動観察をする側から、留意しておきたい面を敢えて記しておくこととした。

## 2. 子どもの川認識の過程

付記した表は、これまでの活動を振り返って、子どもたちが川をどのようにとらえていたか<sup>(表1)</sup>を整理したものである。私は、本表を作成しながら、新たに発見団に参入してくる子どもたちを、どのように活動させ、どのような方向へ進めていけば良いのかという指針としての活用を考えた。

### ○段階の子どもたちのレベル

学校での子どもたちの実態からふれていきたいのをこらえて、川という限定された中で子どもたちの実態から述べていきたいと思う。

私は、帷子川での活動から、少し夢を膨らませて、鶴見川包囲網を作りたいと、一級河川の鶴見川の流域の学校を3校異動して来た。しかし、何れの学校でも、児童は川に近付いて、川を見ることをしていない。例え河川敷で遊ぶことをしていても、流れに目を止めてはいない。社会科で河川の名前を挙げさせても、それらは、駅名と同じで沢山知っていることしか、価値を示すものではない。川のイメージは『汚いもの』ととらえているが、実際は川の面をじっくり見て判断したものではない。遠くの川や田舎の川でキャンプや釣りをした経験をもつものもいるが、それは近くの釣堀で釣りをすると同様、単に川という施設利用を行ったという認識でしかない。

この原因は、都市河川の掃きだめ化現象が起きたためである。川は大量の不要な排水路と化し、暗渠とした川も生じた。こざい住宅から流出する排水こそが、河川

汚濁の元凶でありながら、高い堤防とフェンス、隠蔽された地下水路は、誰の目にも止まらぬものとなった。学校もこれに協力した。『川に近付くな』という警告は、より川離れを促進した。流量を調節する機械や数式に縛られた河川行政は、自然と人の隔絶を意味する。そして、なにより自然を思いのままにコントロールできるという思考に走らせる。こうした河川管理の発想の行き着いたところが、『水は何処から』の問い掛けに対する『蛇口から』であった。

自分たちが川を汚している認識を持たず、水は蛇口からという安直な発想しかできなくなった子どもたちの生活は、生きる活力も想像力も乏しいものとなった。教室で教える勉強は、テストにしか反映しない知識でしかなくなった。現実の生活実感を欠いては、脳の働きも語彙を増やすだけの働きでしかないのである。

実験・観察等、また体験学習等に熱心な指導者もたくさんいる。これも正しい行為である。しかし、もう一步考えを踏み出すなら、今日の例えば『経済成長』のなかに見られるマイナスの面をどう克服するか、冒険してほしいと思う。かつてM校で教えた一部の子どもたちは、知性的にずば抜けたものがいたが、時代の申し子で、人の痛み、川の汚れなど気にも留めず、将来は有能な計画推進者として育つことであろう。

私の試みは、かかる子どもたちへの挑戦でもある。

## 川に気付く段階での子どもたち

発見団の合言葉は『フェンスを乗り越えろ』である。川歩きは、動機は何も必要としない。ゲートインした競走馬は、ゲートが開かれるやいなや、大きく開かれている前方に突き進むだけである。私たちの最初の役割は、子どもたちを川に連れ出すことである。

野に放たれた子どもたちは、一般的には水源を目指して進む。中流域であっても、何も言わなければ、上流へ行こうとする。本能のようなものである。そこで、誰でもが現実を前にして言うのが『川は、本当に汚い』である。

どこまで歩いていっても、無機質なコンクリート護岸。そして、変りばえのしないガードレール橋。普段目に触れているはずなのに、格別の印象もない光景。これが連続する川筋を歩くことで、異様なものと目に映ってくるのである。古い町には、由緒を感じさせる古い橋の掛かっていることがよくある。また、崩れた護岸のなんと自然なことか、土手が生きている。花が咲き、鳥が群がっている。極限られた所の素晴らしさと、無味乾燥的な連続性が合せて意味を持ち、子どもは、初めての印象をくっきりと心に刻み付けるのである。

さらに進めば、子どもは水面を見ようとする。汚い川であっても、そこに魚影を発見し感動する。汚れが魚（主として鯉）に餌を提供していることや、カルガモのゆったりと泳ぐ生活の場としての川を見れば、子どもたちは、見掛けの汚れでとらえられない水の汚れの質を問おうとする。

見上げれば、フェンスの外に人垣が出来ている。道ゆく人は、汚れた川に着目することなく、フェンスの中の私たちの関心を寄せている。子どもたちは、水面に表われ表情と、私たちに視線を向ける人々の意識を問題にする。フェンスを乗り越えるだけ『逆転の発想』が可能となる。川に気付くとは、川の表情に対するチェックと現状の川にしてしまった人々の川認識に気付くことである。

歩みを進めれば進めるほど、川は多様に变化する。あちこちに支流を作ったり、暗渠と化したり、水源の何処にあるかを確定するのは謎解きに似る。工場地帯も何時しか住宅地となり、田園地帯と变化する。変哲もないような川が、流域流域で、確かにその地域の文化・生活様式に作用していることを体験的にとらえられる。

真夏の日差は、正午を過ぎると体にきつく疲労が一時に増してくる。体調が無くては前にも進まない。水筒の水もとっくに飲み干してしまった。だが、見知らぬ場所に入り込んでしまったため、独り脱落は出来ない。水源への到達は、子どもたちにとって、こうした極限状況に近いなかで達成される。本の中の征服者さながらの心境が、さらに次へのエネルギーを起こさせるのである。

この項と、次へのステップをつなぐものとして、作文を付記する。

## 川と私 戸部小5年 中島雄一郎 1979年3月

私は幼少の頃、川に掛かっている橋が怖くて渡れなかったにもかかわらず、なぜか川が好きだった。あまり怖がるので、母に『川へ落すよオー』と、脅かされながら手をひかれながら歩いたものである。それでも、川や橋の名前をいろいろな人に聞いたり本流支流の関係を調べたりするのが、好きだったのだ。

ある日の日記に、帷子川の支流関係を書いた。このことがきっかけで、川の調査をすることになった。調査団は、川野・菅野・片野・それに私で、久保田先生に率いられていく。

初日は、8月1日の予定だったが、台風の影響で延期となってしまった。延期となることががまんがならず、先生の家へ電話を掛けたものである。無性に川の顔を見たくって、風雨のなか築地橋まで行った。川は荒れ狂い、ネズミ色に渦巻いていた。私は、このような川の一面を初めて見た。

8月2日、いよいよ川の調査開始である。川野は『横浜道』、片野は『川の近くにある神社』、菅野は、？。私は『高欄』について、それぞれしぼって調べることにし

た。

帷子川（旭区方面）にそって歩いて行く。うだるような炎天下、調査団は進んでいく。木々の色は深まり、我々は何とも言えぬ快感に浸った。道端に蛇の死がいがあった。ここら辺りには、まだ蛇がいるのだ。西谷陸橋を渡って、左手に行こうと思ったが、行けども行けども道がなく、我々は戻るはめになってしまった。あの橋には参ったものである。

更に鶴ヶ峰駅付近まで来ながら、私の勘違いから、旭区役所へ行ってしまった。中に入ることにし、涼むことにした。飲んだ水のおいしかったこと、この上なかった。

悪戦苦闘のすえ、鶴ヶ峰駅にたどりついた。特に私など、足を引きずるような有様だった。帰ってから私の家に集まり、資料を見ながら、それぞれの課題をまとめた。

二日目、鶴ヶ峰駅から最上流付近まで歩いた。川の水は澄んではいたが、硫黄の激しい臭いが鼻を突いた。何が原因で生じたものか分からなかった。近くに大木なっ染という工場があった。トラックが沢山とまっていたので、大工場ではないかと思ったが、後で父に聞くと中工場だということだった。この付近は、なっ染工場が多い。そのため、上流の水は多少汚されている。

五反田橋を過ぎる頃から、帷子川はほとんど離れて見失ってしまった。細い道路を奥にはいると、再び出会えた。川よ、もう離れないでおくれ。どこまでもついていこうぞ。

とうとう用水路になってしまった川。細く変身してしまった。あの下流のどろどろした川しか見たことのない我々はびっくり。これが帷子川と信じてよいのだろうか。更に進むと、水源付近の川に、幅がちょっと太いところ（40cm）があり、ザリガニが数匹いた。それをとらえようとする、メダカも泳いでいるのではないか。全く予期しないことに出会い、何と言いい表わしていいか分からないほどうれしかった。私たちは、思わずはしゃいでしまった。

三日目、私は、石崎川と帷子川（児童公園方面）が、ほぼ一直線になるということを発見した。この日は、石崎川に沿った道を歩き、これが発見したのである。ただ単に地図を眺めているのでは違って、やはり自分の足で歩き、自分の目で確かめることは、これこそ真実の知識であると思った。

旭区方面とは違ってどこことなく澄んでいる。そして、沸いてくるイメージも違う。何かカエルでも飛び出してきそうな川だった。この川の水源も、児童公園付近で見失ってしまったため、分からずに終わった。

これで第一次の調査が終わり、『グラフ横浜』を資料として課題『高欄について』をまとめた。

先ず第一に、高欄の光りについて、例を挙げて説明した。第二に、高欄および橋の役目。第三に、その移り変り。このような角度から分析した。

高欄の光りは電灯の光りと違い、何となくあたたかさが伝わってくるような感じがする。また、照明のために作られたわけでもないのに、あまり明るくない。そして、この光りは、二人で話をしたいときなど、もってこいのような感じがした。

高欄の役目としては、新田と新田の境の印（そのために高欄をたてた）。当然、向こうの土地との行き来は言うまでもない。しかし、現在では、橋は車だけを渡すものになってしまった。最近では、まともな高欄や親柱がなくなってしまった。大変残念



なことだ。特に橋の改築が激しく、昔ながらの橋がどんどん少なくなって来ている。

11月23日、久しぶりに川を歩いた。大岡橋に沿って日枝橋付近まで歩き、そこから元富士見川（今は埋め立てられている）を伝うようにしていくと、川の臭いのする赤土のような広場があった。赤土といっても、あの赤土独特のちやの色ではなくて、黄色っぽい色だった。その上で、人々がテニスをしている。歩きながらふと下を見ると橋がもぎ取られたような跡があった。そこだけ少し出っ張っていて、しかも辺りの石と色が違う。川の傷跡のようだった。一昔前までは健在だった川。ああ、この川の流れる様子がみたいなあ。ゆっくりゆっくり、その川の周りを見ながら歩いていくと、中村川につきあたって。我々の目指す堀割川は、そこから流れているのだ。あの川が健在だったならば、ここの合流点は、世にも珍しい十字路だったのに・・・惜しい、惜しい、本当に惜しい。

堀割川に沿った道をどんどん歩いていくと、堤防が出たり入ったりしていた。石の色や形から、昭和初期頃出来たものだと、私は想像した。古くなると黒っぽくなる。また、傾くこともあるようだ。

堀割川は、磯子区内に入ると、ほぼ同間隔に橋が掛かっている。これは何を意味するのだろうか。

岡村天満宮へ通じる道を歩いていくと、川の跡のようなものがあった。道が川の跡かすかに残すところだけ、盛り上がっている。これはきっと、一昔前まで流れていた小川だったのだろう。あとで分かったことだが、これは昔『禪馬川』と呼ばれた川だった。岡村天満宮は、そのほりにあった。しかし、空はスモッグに覆われ、人々はせくように動いている。のんびりとして、穏やかで華やいだ雰囲気は、川の消えたのに似て、もうここにはない。

堀割川最下流に掛かる八幡橋に近いところに、八幡神社がある。先生の話によると八幡太郎義家が戦の前にお参りし勝利を納めた記念すべき神社だそうである。

詩 中村川今昔

年老いて勇ましさを失った川  
同じ町をみつめてきた川  
船を背中にのせて運んだ川  
町の人々と生活を共にしてきた川

夏 子どもと一緒に立てた水しぶきが  
降りしきる光りを通して  
金色になり 水面にかかる  
白い光が赤く染まる夕暮れまで  
町の人々は泳ぎ続けた

あさり売りのおばさんが  
橋の真ん中で声を張り上げていた  
川岸に立っただれ柳が  
川風を受けて 左右に揺れ動いた

川が見つめてきた町は  
外観こそ変わらないけれど  
情けも昔のままだけど  
そこここに昔の歴史が刻み込まれているけれど  
演芸場の幾度となく張り替えられてきた看板  
サビに覆われる宿舎  
色あせた町の風景  
今ここに 高速道路の建設が始まろうとしている

## 本当の川を知った段階での子どもたち

中島君の作文の全編を貫いているのは、川への愛情である。川が好きになれば、毎日、川のことが気になってしょうがない。また、毎日出合っているから、川の細かな表情にも気付くことになる。この段階の達成は、前段階と明確に区別されるわけではないが、ただ歩くだけで迫れないいくつかの条件がある。

### ①川全体から流域の川に注目する。

先のような水源探しも、短い川ならば一日で到達できましょう。しかし、鶴見川級になると、一日では不可能であり、上流の様子を毎日知るということは容易なことではない。こうしたことに手掛かりを与えてくれたのが湧水探しであった。

川には、幾本もの支流がある。そして、支流にも多くの細流があって、そのひとつひとつに水源がある。水源探しで迷って探し当てた、最初から分かり切っていたところの当り前の一大発見であった。

最初の湧水調査は、1984年8月『高島台を中心とした地域』『浅間台を中心とした地域』の2冊にまとめられた。前者を例にとってみよう。

《研究の方法・立場》 帷子川子ども発見団団長 佐藤弘志(中3)

- (1) 高島台は川に対して一方の流域面を構成し、この台地に沿い、旧東海道・帷子川があることから、東海道を研究の線として、地域の歴史・湧水・土地の様子を探る。
- (2) こうした方法をとるのは、川を『川を取り巻く風景』としてとらえたいと考えたからである。
- (3) 予備調査とした理由は、これまで行ってきた川調べの方法、一つ歴史的な背景を探る 二つ現在の川の姿を忠実に記録するというに加え、『科学的

な方法』つまり、数値としてとらえる、継続してとらえその変化を測定するということをしたいと考えたからである。そのため、今回の予備調査を通して具体的な定点としてとりあげる場所の選び出しをしたい。

また、こうした方法ならば、大勢のグループがいつも参加でき、手軽に調べられると考えているためでもあります。

◇記録した湧水 10か所  
◇ 井戸 5か所

気負った書き方をしているが、言いたいことは、自分たちの前にある『小さな湧水』に着目せよということである。

湧水は、自分たちの周囲に沢山ある。その小さな流れは、地図上に記された川と同様のものなのだ。また、川歩きで見てきたように、上中下流の際立った生活の違いも、もっと細かく見ると流域ごとに多少の違いがあった。湧水調べは、まさに自分たちと同質の流域を調べることで、川調べが生活と密着するものになるのではないか。だから、毎日だって調べられる。方法を工夫すれば、自分たちの所を流れる川の専門家になれるかもしれない。

この発見は、発見団の活動をこれまでのものと、根本的に区切りを付けるものであった。線から面への広がり。川を流域住民の生活を支えてきたとする見方、流域が生活様式を規制しているという見方。そして何より、流域内を研究対象にしたことから、『身近なご近所』の存在を気付かせてくれた。

私たちの川調べの方法は、基本的には川を歩きながら、自分の目で川の現実をとらえることと、人々のインタビューから情報を仕入れることであった。特に、後者の実践はその特色として、次のように集約できる。

○人々は、喜んで語ってくれる。

○人々が語ってくれているのは、川の歴史ではない、自分の歴史なのだ。

この人々との触れ合いが、湧水調べならば、隣家で出来るのである。近所の付き合いという忘れ去られたものが、湧水調査を通して、子どもたちにも可能となったのである。

湧水調査のメリットを生かすべく作成したテキストを後に付記するので、参照されたい。

## ②研究の対象として川を見る。

①に記したように、毎日見ることは、その表情を測定し、記録することにつながる。湧水調査は、発見団の団長を務めた斉藤君の場合、毎朝7時に、湧水量・水温

・気温・降水量を測定し、湧水のメカニズムを探ろうとした。これを3年間休まずに続けたのである。

こうした刺激もあって、私たちは『場所』にこだわり、そこを知ろうとした。主なテーマは、地名の由来研究・樹木調査・雑草調査・砂の粒子調査・野鳥調査・バックテストによる水質調査・ニツ池調査・アサガオや椿の葉による大気汚染調査・道路と緑地の温度比較などである。これを、幾つかに分派した発見団が競って調査していったのである。一木一草にも名前があると気付いて、熱中する子どもたち。自然探究の方法を身に付けた子どもたちは、川歩きすると、前の段階の子どもたちと異なり、黙々と各個人別のテーマにそって記録をまとめてくれた。

確かに研究の対象として川を見させていくことは、間違いではない。正しい方法であると確信できるが、私が失敗した事例も記しておきたいと思う。

例えば、水質調査や大気汚染の調査である。水質については、CODやアンモニア・亜硝酸等の濃度を測定する。大気汚染についても、光合成からどれだけ酸素がツバキの葉から出たかを測定する。これらはかなり高度なことで、中学生・高校生レベルの内容である。私は、たとえそれが高度であっても、子どもたちに理解できる限りは認めてもよいという考えには立っているが、失敗は別のところにある。専門的・高度な方法を手中にした子どもたちは、それによって『川を知った』と錯覚するのである。さらに、次の代に参加してくる子どもたちは、高レベルのところから出発するため、理科の実験室に飛び込むようなものである。

これは、大人たちのバード・ウォッチングも同様であろう。誰もが初心者のうちにはよい、やがて知識が増すごとに、会は興味の方向、知的レベルによってどんどん分派し、新参者にとってはかなりハイレベルになって付き合い切れないのによく似ている。

### ③様々な川の顔に対する興味関心を示す。

NEW鶴見川発見団 滝沢賢治（中2）のレポートを一部抜粋する。

#### (1) 多摩川（東京都大田区）

朝、通学の電車に揺られながら多摩川を渡る。夕方、再び多摩川を渡る。そんな毎日の繰り返し……。時間にして1分にも満たないその時間にも、想いがある。多摩方面から流れてきたと思われる洗濯の泡。一昔前『多摩川にサケを』なんてキャッチフレーズがあった。多くの通勤客の目には、川はどう映っているのだろうか。極当り前の現象として見ているのだろうか。

#### (2) 入江川（横浜市神奈川区）

知らないところを歩いてみたくなって、大口から新子安へとタウンウォッチングした。家々の間を流れる川—入江川。そんな川にかかる小さな橋。住

んでいる人にとっては、何等もの珍しくもない風景。ふと足を止めると、潮の香りに混じったヘドロの臭い。社会から見捨てられて動けなくなった川。そのうちフタをされてしまうのだろうか。初冬の風は冷たい。

(3) 宮川（岐阜県高山市）

乗り継ぎの列車には、1時間もあった。飛騨の小京都と称されるこの町に途中下車することにした。駅前から細い道の続くありきたりの地方都市。しばらく歩くと、観光の目玉である黒塗りの古い家々が保存されている町並があった。一か所だけ人で賑わうちぐはぐな町。その町に、宮川は流れていた。錦鯉の群れが川面に映える。観光都市だけに、市民が定期的に掃除しているに違いない。赤い欄干に持たれながら見つめている観光客。町にとって、川の存在はどんな意味を持つのだろうか。束の間の1時間は終わった。

(4) 塔ヶ岳下の清水（丹沢）

夜通し大倉尾根を歩いてきた一行は、ようやく塔ヶ岳に登りつめた。水筒の水も残り少なで、水を汲む必要があった。こんなとき、日本は本当に水の豊かな国だと、つくづく思う。尾根を除けば、大体あちこちに水が流れている。

山頂から5、6分も下ると、こんこんと水を湧き出す清水があった。冷たい水は、熱くなった旅人の体と疲れを癒してくれる。水の豊かさにおぼれて好き放題にしているのだろうか。ぼくの町の中の枯れた湧水を思う。

――以下 9か所の記述があるが省略する。

興味の示し方の事例として、引用した。線としての川から流域へ。そして、川への関心は、再び広がりを持つ。電車に乗っているときも、下を流れる川筋に目をやる。新聞の記事から、各地の川で何が起きているのか知ろうとする。さらに、P10の中島君の作文に見られるように、怒った川がどんなものであるのか気付くのである。川をテーマにする会議の例として、始めに『自然溢れる川』の理想論が展開され、盛り上がってきたところで、『洪水に対する考えを聞きたい』と来るのである。私に河川管理者を弁護する気持はないが、洪水から始める議論は正しいと考えている。むしろ『洪水がある』という前提なくして、川は語れないと考えている。

話題を戻す。こうした、多面的な川の様相を知ることが本当の川を知ることになるのであるが、一番の絶対必要条件は、美しい自然の川で遊ばせることである。

自分の川体験から照らして、子どもたちに欠けているものを私は探していた。

『汚れた川だって付き合っているうちに好きになるはずだ。現に私もきれいだといえない滝の川が出発点ではなかったか』私は、そうとらえていた。

『よこはまかわを考える会』のメンバーは、大岡川で『汚い川にもどろんどろん遊ぼう』がキャッチフレーズである。当然、川に入ることは賛成である。しかし、研究の対象として汚い川に入っている私たちとしては、遊びと学習を区別して

いるわけではなく、遊ぶだけではその先の見通しが持てない。関東学院の宮村先生の『きれいな川で遊んだ思い出をもった大人だけが、今の汚い川にやるせなさを感じる』の言の方をとって進めたらどうだろうかと考えた。

発見団では、毎年道志川で、夏の一日を思う存分遊ぶことを恒例にしている。この結果は、研究を越えた成果があったと確信できる。勿論、川の理想として道志川があるわけではないが、子どもたちには、川を見る視点の基準に据えて、他の川も見られるようになったといえる。

以上のようなことから、子どもたちにとって、どの川を見ても、課題意識をもち問題を見つけられるようになった。また、それは、決して、川の欠点だけをとらえるというのではなく、どの川も『発見に価する魅力がある』というとらえが出来るのである。

自然に対する畏敬の念、自然を前にしたときの自己の大きさ（小ささ）は、詩や文章にも表われてくる。調査記録の克明な記述への執着もまた、こうしたなかで育つのである。

## 拠点に立って

### 川が見られるようになった段階の子どもたち

#### ①『私の川』意識で川を観る

『私の川』なる言葉は、『滝の川』の冒頭の調査目的の言葉である。究極、私たちの行ってきた川調べとは、ここに落ち着く。私の川だから、常に関心がある。水が増えても減っても心配する。汚水を流して平気な顔なんてしない。発見団にとっては、『鶴見川』が地球上でいちばん大切な、いちばん好きな川だ。だから、汚すことを許さない。消滅させることを許さない。『鶴見川』への自己のこだわりは、水辺も自分の障地だから、降りるのも泳ぐことも自己の責任としてとらえさせる。他者に対しては、流域の住民として同じ立場で連帯して川を守る。だが、川を汚すもの破壊するものには鉄拳を挙げる。こうして働きかけていく川だから、『思い出の川』になる。

## ②水と緑 環境全体に対する関心を持つ

『私の川』意識は、決して利己的なものではない。私たちと私たちの子孫が、この流域で未来永劫生活し生き続けるということは、川が生きているということである。緑が息づいているということである。川の生物が死滅するところに、私たちの生きられる保証はない。

『平和—それは自然を守ること』大綱中1年 上野 真理

私たちは、あらゆる面で豊かな、便利な世の中に生きています。何もかもが進歩し、発展した今日ですが、私たちは本当に幸せでしょうか。平和な日々を送っているのでしょうか。

実際は、地球の平和がいつも脅かされているのです。広がる砂漠、酸性降下物の恐怖、増え続ける排気ガス、汚染される河川等、数えればきりがありません。そして、その原因が全て人間にあることは、認めざるを得ないのです。文明の進展は、大気を汚し、海を汚し、今、人間の心までも汚そうとしています。汚い空気を吸い魚のいない川を眺め、星が見えない空を仰ぐ。そんな生活が、人間の本能を鈍くしたのではないのでしょうか。その証拠に、至る所で生活がむしばまれているのを、誰も気にしない。あるいは、気付かないのですから。

私が最も恐ろしいと思うのは、木を枯らし、魚を殺す、酸性雨です。化学反応によってできた、イオウ酸化物や窒素酸化物が酸となり、乾燥した粒状の有害物質となって、雪や雨に混じって降ってくるわけですが、これによって、北欧、北米東部では多くの被害が出ました。これは、自然破壊が進むだけでなく、オゾンへの間接的な害も起こりうるため、重大な問題です。もし、酸性降下物が増加した場合、地球上の生物は絶滅するかもしれません。そして、人間も危険なのです。

身近な例を挙げても、騒音、震動、大気汚染、熱公害など、普段よくいわれるとおりです。車、電車、飛行機の交通機関が、便利になればなるほど、これらの公害がひどくなるのは目に見えています。しかし、だからといって交通機関を利用しなければ、私たちの生活は成り立っていきません。自然との調和を保ちながら、無理なく経済を発展させる、これが今の課題であると思います。そのためには、まず多額の費用を自然保護に費やさなくてはなりません。そして、森林や河川の乱開発をやめ、環境の破壊をくい止めなければ、木や雑草やザリガニやフナたちが死ぬのです。家の近くの空き地にも、住宅が建ち並び、おたまじやくしのいた池もつぶされてしまいました。これから生れる子供たちは、バッタやカマキリをさわらないで育つかもわからないのです。カマキリみたいに小さな昆虫までもがいない世の中が、平和と言えるのでしょうか。それを考えると、円高や貿易黒字なんて、ちっぽけな問題に思えてきます。今すべきことは、人間の利益をふやすことではない。私たちに大切な資源を与えてくれた、森や川に感謝することだと思うのです。

近くにある鶴見川は、汚い川『ワースト5』に入る川です。でも、土手を走ったり、水を眺めたりしているうちに、川の本래の姿に気が付き、いつの間にか親しみをもって川に接し、ふれあうことができました。やっぱり川も生きているのです。

私たちが、『自然』に恩返しをしなければならぬ時代がきました。人間が、今ここに存在するのは、森や川や海があってこそだからです。とても豊かで幸せそうな時代が、実は最も危険な時代であることを、忘れてはいけません。未来の平和は、自然を守ってこそ築かれるもの——そう信じて、地球上の小さな命を大事にしていきたいという気持ちでいっぱいです。

つまり、自分のよって立つところの拠点から川を凝視することは、下流のごみ処理に努力しつつ、上流の処理を問題にするのと同じように、現在の『鶴見川』にこだわり、周辺の緑、環境全体へと目を開かせることになるのである。即ち、変革の主体者意識を持つようになる。

私は、狭義の住民運動という性質のものではなく、子どもたちの『自立』というようにとらえ、生活の場において自己を広げていく『力』としてとらえた。そして次章に述べるが、子どもたちの意識を結びつけ、各人にその意識を鮮明に刻み付けさせようと考えたのが『子ども会議』である。

別表1の如く、本章では、これまでの川歩きを通して見た、子どもたちの川の認識の深まりをまとめてみた。川調べが本格化するにつれて、私も結果（冊子にまとめる）を出すことに夢中になった時期もあった。社会がそれを期待することに、私も応えようとした。発見団の活動が軌道に乗り、子どもたちの年代がうまく次を養成するように組めたときはそれも可能であった。また、『発見団』と称したことで『どんなことを発見しましたか』と聞かれることがしばしばあった。

しかし、この認識過程は、各個人について当てはまり、発見団全体の流れが既に到達点に至っているわけではない。至った子どもたちもいるが、彼らは卒業し、次には自分たちにとっての新たな目標に迫ろうとする。私の務めは、新たに参加する子どもに対して、やはり無駄と思われる川歩きを計画するしかない。その過程のなかで、次のステップ、個々に生れる関心の方向を見極め、子どもたちの力量に応じた方法で取り組ませていくことを工夫すれば良い。

『発見は何か』の問に対しては、『子どもたちの気付いたこと全てが発見』と答えるようにしている。子どもたちの意識を問題とする上で、こうした認識で迫ることが常に必要である。



### 3. 子ども世界の構築

川調べの体験と過去7校を転勤してきて気付いたことを中心に、この項をまとめてみたいと思う。

最初に転勤を希望した理由は、ただ単純にいろいろな子どもたちと会い、いろいろな場で自分の力量を試したいということである。加えるなら、優れた諸先輩との出会いを通して、自分なりの方法論を持ちたいと考えたからでもある。

しかし、これまで述べたように川と子どもの接点を模索していく過程で、

(1) 『私の川』意識をどう育成していけばよいのか。

(2) その運動論としての、鶴見川包囲網をつくりどう進めていけばよいのか。

というようなことを、私自身が課題として鮮明に意識するようになり、異動も一つの問題解決の手段として考えるようになった。

人間の持つ意識をあらゆる面に開放し、自由たらしめるために、本論の展開がある。それ故、上記のような目的を設定して迫ることは、このテーマを拘束し、観念論的に子ども世界の創出を論ずるものと思われるに違いない。従って、私の取る立場（限界）を、まず明らかにしたうえで、本論を展開していきたいと思う。

汚れた川が『私の川意識』のもとで、良い方向への対応がなされていく。これは川に限ったことではあるまい。私の家族から始まり、私の学校、私の緑、私の山、私の商店街、私の町と意識は広がる。地域に生きる人々がその地域のあらゆるものと『一体感』を持ち、それらとの関連のなかで、自分の生き方を決定していく。愛国心というところのないところまで拡張するのではない。自分が呼吸し、自分の生きているその場所にこだわるのが肝心なのだ。

自然や風土、文化と歴史、生産と消費あらゆるもの活動をふまえて地域を見ると、今日的な問題を発生させている解決の糸口が見えてくる。上流の人間が汚したつけを負う下流の住民、生物の生きる場を保証しない河川の下水道化、車の排ガスの充満する住宅地、希薄になった人間関係等々、『見えざる手』が私たちの生活を育かしている。近代化は、合理化、機械化、能率化、肥大化、数量化への道でもあった。

川の魚の姿を発見し、木に野鳥の来るのを見れば、自然は人間のものだけでないことに気付く。人間と自然との共存を考えると、近代化によって見失われてきた生命系の原理が、今正に必要なときであることを悟らされるであろう。

本論の前提として述べる関係上、詳細は省略して進めるが、私の地域へのこだわりはこうしたことによる。そして、限られた地域の中で、一個人が地域の政治、経済、歴史と無縁なものでなく、労働が集団の維持存続のための価値を持ち、生産と

消費・生と死が完結する（平衡する）システムを考えている。例えば、上大岡での街づくり等の視点も、こうした方向性をもって進められているはずである。

また、ききにふれた包囲網なる考え方は、この地域的広がりをもとらえていくかという、私にとっての課題的意味を持つものである。川に関連しては、地域を流域的にとらえていくの意味・面白さに、現在関心を寄せている段階である。

自分の生を自分の生きているその地域に賭けることは、一つの思想性を持つことになる。だが、これは私自身の問題であり、子ども達に強制するものではない。言えることは、こうした視点を持ってみると、子どもの世界がある形を持って見えてくるし、これをなしとすれば単なる傾向に過ぎなくなることを考え、前半に提示しておくこととした。

本論に入る。最初に私の目に映る子供たちの姿を、一般的な子どもの特色・学校教育の中での子どもの主な傾向・川歩きの中での子どもの姿という形で述べる。

### 《一般的な子どもの特色》

- すぐに疲れる。頑張りがきかず、自分の不足を補えない。
- きわめて幼稚である。
- 危険なものは駄目。何が危険か分からない。
- ストレスがたまりやすい。
- 表情が乏しい。
- 友達の価値は偏差値で決定。
- リーダー不在。リーダーの登場を期待している。
- 先が読めない。
- 加害者になる良い子。被害者になる子は、自分の非を認めない。
- 仲間仲間がよく集まる。みんな同じ顔。仲間の親密度は高くないが、他に対しては、きわめて排他的。
- 塾好き、テスト好き、部活好き。どれもなかなか止めない。
- 強い意見、リーダーに従うふりをして、考えることを拒否する。
- 人のせいにする。間違い失敗を認められない。
- こざれい。目立つこと大好き。
- 価値の基準をT.Vの映像に求めている。
- 遅寝遅起き
- 答えは言うが、意見は言えない。

### 《学校教育のなかでの子どもの主な傾向》

- 国語—文章を書けない。話しすることは、上手な子と苦手な子に大別。上手な子も、言葉が上滑り、実質的な裏付けに欠ける。  
一昔の子どもたちは、訴える力が話し方にも書き方にも表われていた。物語の読みなど感動をもって受け止めることが出来ていた。
- 社会—大半は、社会事象に対する関心が希薄。知識があつて物知りではあるが、自ら体験して知ったことではなく、本・TVからの知識である。折角調べたことも、書く力を欠き、まとめられない。
- 算数—ゲーム感覚で迫り、大体の子が計算問題を落ちなく消化している。文章題を苦手として、読み取りのできないまま諦めてしまう子も目立つ。
- 理科—実験が大好き。しかし、用具の扱いなどきわめて乱雑。結果をすぐ知りたがる。予想したり仮説を立てたりすることは出来るが、筋道を立ててその通り実践していけない。植物・動物の世話・観察が苦手、その生死にも鈍感。
- 音楽—音楽は好きなのに、学校音楽に価値を見出せないでいる。よい音を出す・声を合せることの良さに気付いていない。ピアノを習う子どもは多いのに弾く意味を機械の扱いと同類にしている。
- 図工—よく見るということが出来ない。丁寧に仕上げることができない。作業が遅い。
- 家庭—男女の差が無くなりつつある。実習大好き、但し、作業は手慣れてなく遅い。
- 体育—球技ばかり大好き。すぐに試合をしたがる。柔軟性・持久力に欠ける。
- 特活—楽しい集会ばかり好き。しかも、賞品などにも凝って熱中する。
- 道徳—一人のことならきれい事を羅列できる。実践は別。

### 《川歩きの中での子どもの姿》

- 一人で参加できない。
  - ・友達と一緒にいることが目的になっている。
- 歩いても川を見ていない。
  - ・問題や疑問を持たない。『なぜ』『どうして』という以前に、風景を見ていない。常に素通りしてしまう。通り過ぎたあと、一見の価値ありと忠告しても、戻って見に行かない。
  - ・川を歩いていて迷子になる。上流下流の別さえ不明確で、先行する者の後を追

えない。

・以前の調査の体験や授業の中の話を生かして川を見れない。

○見た事実がまとめられない。

・問題意識がないからまとめられない。

・語彙の不足も大きい。

・調査報告を義務付けているが、未提出のままやり過そうとする。

○すぐ疲れる。

・水筒の水をすぐ飲み干してしまう。水よりジュース（自動販売機）

・帰路乗り物に乗ると目的を忘れる。

・小休止するとゴムボールで遊ぼうとする。過去には持ってくる子どももいなかったし、地図を広げて位置を確かめたり、その辺りの様子を見ようとする子どもが多かった。

○こうした活動に参加したがる。親も勧めない。

・無事帰宅後の連絡をする家庭もほとんど無くなった。

○目立つ舞台には出たがる。

・資格としての調査活動に参加もしていないのに、発表者や司会者などをやりたがる。

・賞状や賞品を欲しがらる。私たちは、川をよくするため人々に働きかける立場にあること、また、会議では常に主催者であることから、報酬を一切認めない立場をとっていたのに、こうした原則を忘れてる。交通費やジュースなどを平気で要求したりもする。

こうした子どもたちを、『絶えず燃り続け、風吹けばたちまち消える導火線。風吹かずとも絶対爆発しない爆弾』『アリを笑う夏のキリギリス。秋風吹けば万事休す』『暴力反対。ゲーム大好き、何でも数字。頭（ずる賢さ）の差が全ての序列』などと、形容してみたがどうだろう。いかなる場面でもこの傾向は否定できないにちがいない。

私は、当初、これらの子どもを生んだ原因を未熟社会のなかに求めた。しかし、家庭・学校・地域の教育力の未熟さに原因があるとしても、未熟にさせている何かを捜当てないかぎり問題解決にはならない。

河川の問題にあてはめて見た場合、河川対策の不備・技術的な未熟さが『都市河川の掃きだめ化』をもたらしたといえるのだろうか。答えは『否』である。

江戸時代、豪商・豪農による新田開発が利殖の対象として扱われたことがあったにせよ、一般には、自然と人間とが如何に調和して生きるかが、この時代までの大きな関心事であった。

土地利用・水利用のあり方、上流の緑、これらを統合して、生きている川とどう付き合っていくか、それが生活する上での大きな決定要素であったのである。

明治期施行された治水三法は、①水害対策優先策 ②水利権の決定 ③国家による水支配の法制化 を意図したものであった。これは、国家を工業型社会に移行させるという目的と連動して進められた。川の自然機能の不信感から、川のなかの自然解体を促進し、川の無機化・施設化が計られるのである。

更に、高度成長期にあつては、河川の都市化現象が生じ、

①下流域重点策（上流・中流・下流の分断政策）

②行政の分業化

③機械と数式による政策

をもって河川対策が取られるに至った。この結果が、大量の工場・家庭排水を川に流し込むという、河川の下水道化をもたらし、総浪費のつけを負わされる運命となったのである。三面コンクリート・フェンス張り、河川の暗渠化は、元凶である私たちの『自分たちが汚している』という意識さえも、見事に消し去り、問題を先送りにしていったのである。

かくして、川という一面からみても、『近代化の根底に潜む病魔』は、『見えざる手』をもって、自然と人間を隔絶させ、人間の心に『自然を自己都合で加工する（破壊しうる）』という傲慢さを生ませた。つまり今日表われてきている現象は、こうしたことの必然的な帰結でもあった。

各家庭は、社会が求める豊かすぎる消費生活の上に成り立っている。また、一定の賃金水準、生涯賃金から、見え見えのライフサイクルに応じた、住宅・教育の進め方が決定される。

社会では、経済的効率、国際競争力の優先の路線にそつて、その兵隊養成のための管理主義・能力能率（偏差値）主義がはびこる。等質化・均一化されていく子どもはロボットとなり、選別され差別される。予見しうるリスクの芽をどんどん摘み取つて、あらゆるものが路線の規制を受ける。無機化する道は、川と同じ道をたどっている。

個々の人間は分断され、伝承伝達の欠如から、人々にとっての生活規範は、ニューメディアを通しての情報しかない。知識はあつても知恵に欠けるというタイプの人間が多くなったこともうなづける。『How to・・・』だけでは、人と人とコミュニケーションも成り立たない。人間関係がストレスのたまるものでしかなくなった結果が、人間疎外である。

地域・学校・家庭の子どもたちは、いずれも社会の反映であることに違いない。

こうした現状認識に立って考えるなら、どのような子どもたちが本来の子どもであり、そうした子どもたちのための子ども世界を創出するためには、私たち自身によるどのような働きかけが必要であろうか。

古来より、性善説・性悪説の両極があってもここで問う必要はない。また、『理想的世界』を現実から遊離させて、高い次元に求めるものでもない。

子どもの世界とは、今正にそこにあるところの現実の世界である。ただ、大人社会からもろにかぶっている影響を排除さえすれば良い。

私は、子ども世界を『混沌（カオス）世界であって、そこでの体験を通して、本来あるべきところの自己、今現在の拘束から切り放され、見えないでいるところの本来の自己に気付いていける世界』と規定する。

混沌、それは本来的に不合理なもの、無秩序的なものを内包する。約束の不要な世界とも言える。従って、子ども世界は、次のようなものである。

☆夢を追う / アイディアに溢れる創造性 / 遊びに熱中する / 可能性を確信する / 大いなる冒険がある / エネルギッシュな活動がある	自己理解の能力 自己変革の意志と努力
☆成功と失敗の豊かな体験がある / 失敗の許容される世界である / 自らの自治活動する場である	認識力 判断力 思考力
☆様々な人との関わりのある集団である (異年令集団・地域の老人等) / 喧嘩してもすぐに仲良く出来る集団である	正義感 批判力 連帯性
☆自然のある世界である (興味や関心をもてる / 生と死がある / 素直になれる場である)	生命尊重の気持ち 自然感を育てる
☆嬉しさと楽しきの体験ができる場である / 恐ろしさと驚きの体験ができる場である	みずみずしい感性 表現力 学習力

本来的には、『川の前に立たせれば良い。それによって何かが始まる』と、先に述べた。この子ども世界も混沌なるが故に、そこに存在させるのに何ら条件もないはずである。確かにその通りである。だが、川の前に立たせない現実と、歪められ世界のなかにはあっては、やはり意識的・意図的働きかけが必要となってくるのである。

る。この働きかけを教育と私はとらえている。

教育を学校という閉じられた世界のものとして限定してはならない。学校教育とて、既に述べたように大きな社会の潮流の流れのなかにあつて、本来的な機能を失っていることも自明の理である。

次に『教育』の原点から、子どもたちに迫る方法を探り、私の教室での試みについて述べてみたいと思う。

子ども世界の構築という観点からすれば、子ども環境に対する視点を大人が持っているということである。つまり、大人の側の子どもの理解が深く、子どもにも立派に共同体構成の一員としての役割が与えられていて、子どもとの窓口が明確である社会であることが必要なのである。川を歩くとき、我々はフェンスの中から川の外をみて、人々の川への関心の無さを発見した。同様に、大人たちは子どもの目の高さで見ても、今現在、子どもたちの目に何が写っているのか、大人側で明確に把握すべきである。そして、子どもたちの疑問に誠実な態度で耳を傾け、解決へ向けて子どもにもその任を負わせ、大人と共に進めさせるのである。

こうした体験（特に労働体験が重要）と、地域学習を重視した教育システムを確立させ、合せて感性を磨き、学び方を学ばせるという教育の基本が尊重されるなら今日とは全く違った子ども世界が誕生するに違いない。

もっとも、大人社会の側に実質的な時間的・精神的ゆとりがあり、子どもに対して、柔軟な対応がなされ、可能性の信頼と共感的態度で接しない限り、何等の効果も期待できるものではない。

### 《学級での試み》

#### ①学級の教育目標

- 互いに協力しあい、仕事や研究をやりとげられる。
- 自分の気持ちを素直に自己表現できる。

#### ②方針

- 聞く、話す、書くなどの基本的態度の養成（個の確立）
- グループ活動、係活動を通して協力の意味を知らせ、社会性に目覚めさせる（実践活動の場の設定）
- 基礎体力の質的向上をはかり、運動の厳しき、楽しさを知らせる（心身の発達）

#### ③指導の努力点

実存的理念（形成的要件：自由・独自性・有限性）に基づいて考えるとき、指導の方向は、自己をこの世界に存在する共同体に有用ならしむるよう進めるべきであると考え。これを是とするならば、

○共同体の歴史的精神の覚醒

○労働に対し、その意味のおさえと習熟を固めていく必要がある。

そして、この方向を目指すためには、

○指導過程、指導目標を単純化する（あらゆることがそこへの目的とする）

○こうした学習の習慣化を通じたところの子どもの心の内面化、高層化を図る

#### ④個の確立のための教科のとらえ

○A群（指導の根幹を成すもの）

即場の提供が出来るもの（音楽・図工・体育・文）

《内包するねらい》・学ぶ精神（思考手段、鍛錬、模倣、想像力……）

・共同体（和、模倣、闘争、愛……）

・有限性（生き方、生命、鍛錬、創造……）

○B群（根幹の周辺を形成するもの）（組み立て、技術、合理、科学、発展）

・国語（読解、作文、文法、論理……）

・算数（技術、推理、論理……）

○C群（知識としてあればより助けとなり、正しい方向を知る手掛かりを与えてくれるもの） 社会・理科

⑤各教科学習の重点—各年度の児童の学年、実態に左右されるので省略する。

⑥その他 父母に訴える『子どものとらえ』の主な内容

○学校と家庭の子どもは別人である。

・家庭での良い子は、必ずしも学校で皆から好かれる良い子でない。

・親以上に子どもは賢いケースが多々ある。

○子どもは大嘘つきである。

・空想力の大ききこそ、大人と区別されるべき最大のもの。

・本当のこと（事実）は、別のところに存在する場合もある。

・子どもの言葉を広い視点からとらえて理解すべき。

○嘘と嘘の世界でも子ども世界は成立する。

・教師も嘘づくりに一枚噛んでいる。

・ドラマの世界に親の真実を取り入れた瞬間、世界は崩れる。

○可能性はにじみ出てくるものではない。

・体験させて発見するもの、何らかの継続的行動（必ずしも努力ではない）の中から生み出されるものである。

○遊びから子どもは学ぶ。発見のない遊びは、逃避である。

○勉強のできる子は、ただ一部の才能が恵まれているに過ぎない。

○生活態度の育成は、今しかない。



遠大なテーマをもとに記したため、書きながら矛盾している点、説明不足の箇所等を沢山露呈してしまったようである。また、学級での試みにまで及び、蛇足の感のを免れぬ気もしたが、これも将来的な準備へのメモと考えれば気が楽になる。

私の学習指導は、国語・社会・算数・理科についても、ここに周知的扱いとしてはいるが、かなりの強制的指導と自己反省している。しかし、他の教師と比較するとき、私が根幹と考える学習に、教師はさほどの執着を持っていない。あっても熱意は技術の向上に向けられているように思える。

川も同様であろう。8月2日の今日の様に33度の灼熱の日差のもと、目的が何であったのか分からなくなり、夢遊病者のごとく川筋をふらつく発見団の子どもたち。価値を名誉やある種の成果に求めたら、無駄な努力である。研究方法、追求能力の向上を図って、それがプラスになるものとしても、私は『子どもたち』に、それらは強制しない。強制は、『ふらつく頭と目で、川だけは見ろ』のみである。

発見団の活動は、湧水調査、古家調査、バックテストによる鶴見川下流域の一斉調査、アサガオ・ツバキの葉を使った大気汚染調査と、子どもたちの力で鶴見川に科学的にメスを入れる手法を確立して来た。それは認めるとして、福井団長の『ぼくらの方法は、理科よりも傾いて、データのどうかなどと言いつぎたようだ』とこぼしているように、本来、『川を自分の目でとらえ直す』ことであり、『熱気かられて川を歩く』ことであった。

また、本当は、汚い川でなく水のきれいな川で、思う存分遊ばせたい。きれいな川での水遊びこそが、豊かな水辺のイメージを子どもたちに与えてくれる。子ども世界の舞台もまた、重大問題なのである。

ここでの結論は、子どもたちを『自ら熱中しうる世界へ投じよ』である。私は、教科という学習や川という舞台での子どもたちの世界を模索し、そこに熱中する子どもたちの姿を見たが故に、今そこにこだわりをもって生きている。

大人たちは、どの側面からでも良い、子どもを理解しうる、子どもとともに活動しうる場面を見つけたら、そこを覗いてほしいものである。

子どもの世界は、子どもたちにあってはエネルギーの渦であっても、子どもの世界の構築となると、これは大人たちの問題であって、自己の子どもたちに対する見方が問われ、各人がどう見るかによって、各人の構想、取り組みがなされるべきではないだろうか。皆さんが見た子ども世界の様子をお聞きして、その実践から、私も大いに学びたいと考えている。

## 4. 子ども会議の方法論

1985. 9. 15 第1回『見つめなおそう—私たちの川・緑』（戸部小） 参加 150名  
1986. 11. 3 第2回『忘れてはいませんか—私たちの川・緑』（大豆戸小）参加 120名  
1987. 11. 29 第3回『川を中心に身近な環境を考え直そう』（港北公会堂）参加 600名  
1989. 2. 19 第4回『きれいな川づくり ぼくらが主役』（緑公会堂）参加 700名  
1990. 3. 4 第5回『きれいな川づくり ぼくらが主役』（鶴見区役所）参加 200名  
1990. 11. 18 第6回『きれいな川づくり ぼくらが主役』（港北公会堂）

以上がこれまでの経過である。

1回、2回は発見団内部の研究発表・交流会的要素が強かった子ども会議も、第3回港北区主催という形で成功をおさめ、以後、鶴見川流域の3区—鶴見区・港北区・緑区—が持ち回りで開催されるようになった。目的としても、流域の人々の河川への啓蒙という、大きな役割を担わされることとなったのである。

ここに、第6回の企画案を提示するので、まずそれを見ていただいた上で、説明を付け加えていきたいと思う。

### 第6回 川と緑を考える 子ども会議（企画案）

主催：水辺のさわやか運動鶴見川港北区実行委員会  
川と緑を考える子ども会議実行委員会

後援：横浜市港北区役所・横浜市下水道局  
横浜市教育委員会・建設省京浜工事事務所  
朝日小学生新聞・朝日中学生ウィークリー

協力：よこはまかわを考える会

#### 1. 実施目的

- 『水辺さわやか運動』の趣旨である河川の清掃美化・河川緑化・河川愛護・親水活動をふまえ、住民相互の連帯と共生を醸成することを目的として実施する。
- 鶴見区・港北区・緑区を流れる『鶴見川』の清掃活動及び河川愛護を目的として各種イベントを3区統一して実施する。
- 今回港北区の開催に際しては、特に『港北ワンダーロード探検隊』等の一連の行事を本子ども会議の中に位置付けて実施するものとする。
- 本イベント運営については、第3回港北区において実施された子ども会議で選出された『きれいな川づくり、ぼくらが主役』をメイン・テーマとして掲げ、『川と緑を考える子ども会議』を企画する。

#### 2. 子ども会議の趣旨

- 『水辺のさわやか運動』の啓発、及び『区の魅力づくり施策』一つである『港北区ワンダーロード整備事業』の推進の場とする。

- 鶴見川流域の仲間が『鶴見川新聞』を通し、緑や川の自然についての情報を交換しあい、考えが深めあえる場とする。
- 子どもたちによる、川と緑を中心とした研究や活動の研究発表・体験報告・討議の場とする。
- 社会の大人に対して、また同世代の仲間に対して、子どもの調査活動の独自性や柔軟な発想を示すとともに、川や緑の隠れた魅力について訴える。
- 子ども自ら会議を計画・主催し、管理・運営を自分たちの力でやる。

### 3. タイトルの表示

今 港北がおもしろい!?  
 第6回 川と緑を考える子ども会議  
 ～きれいな川づくり、ぼくらが主役～

- 4. 実施日時 平成2年11月18日(日) 午前9時30分～午後3時
- 5. 場所 港北公会堂 最寄り駅:東横線大倉山駅 徒歩8分
- 6. 参加対象及び呼び掛けの方法

- 小学校中高学年児童、中学校生徒及びその父母
- 港北区ワンダーロード探検隊メンバー
- 『鶴見川新聞』の応募者                      ○教育関係者
- 広報区版において区民に連絡(10月の区報に掲載)
- 町内会自治会を通じて連絡
- 河川活動団体に直接連絡
- 校長会により各学校に呼び掛ける
- 『鶴見川新聞』に応募の優秀作品の展示、新聞掲載、表彰を行い川と緑への関心を喚起する。

7. 参加人数 250～350名程度を予定

### 第6回 川と緑を考える 子ども会議 内 容(プログラム)

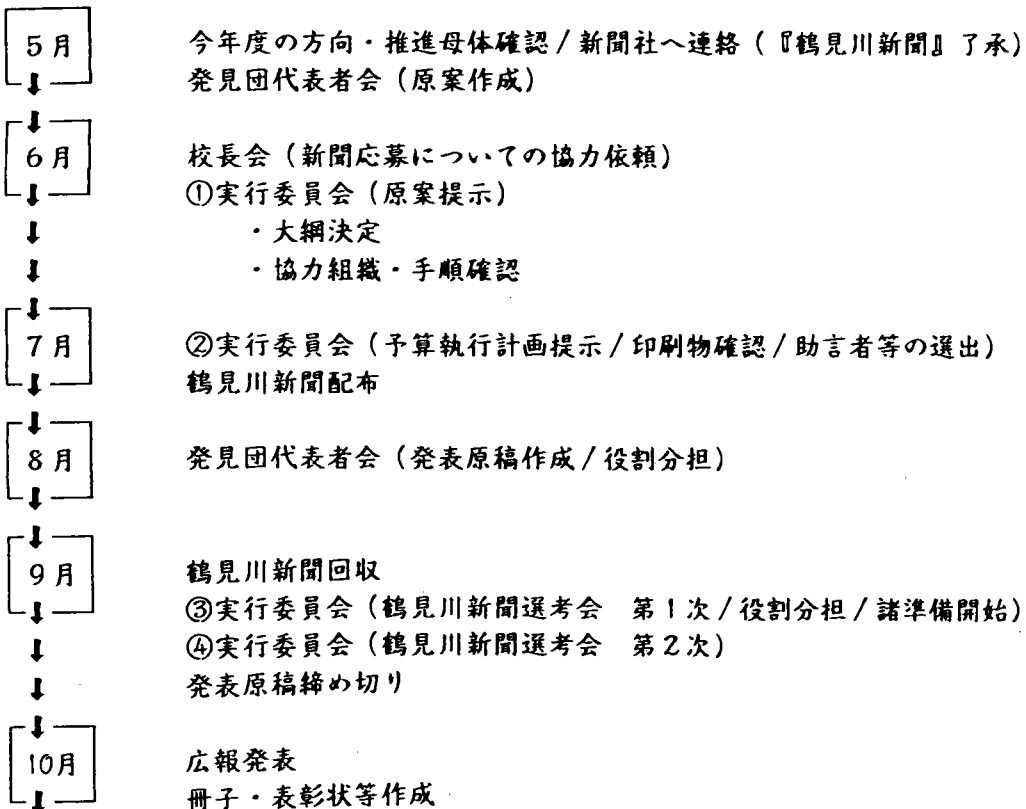
9:30～	9:35	接 拶	水辺さわやか運動鶴見川港北区実行委員長
9:35～	9:40	趣旨説明	子ども会議実行委員長(発見団)
9:40～	12:00	発表討論	

- 発表団体枠 20分×7団体
- 発表希望団体 発見団・帷子小・探検隊・他  
(提案内容確認・冊子にまとめる=期日)

助言者(よこはまかわをを考える会より)紹介

- 12:00～12:30 昼 食 ※弁当持参一留意事項
- 12:30～13:00 全員参加による劇
- 13:00～14:15 大討論会 『世界の川から日本の川を見る』  
 ※大人を相手に質問攻めの形で迫りたい。  
 ○提案者の人数  
 ○区長の紹介
- 14:15～14:50 鶴見川新聞表彰式  
 ○横浜市下水道局長賞  
 ○横浜市港北区長賞  
 ○建設省京浜工事事務所長賞  
 ○朝日小学生新聞賞  
 ○朝日中学生ウィークリー賞  
 ○優秀賞・優良賞・努力賞・イラスト賞  
 ・アピール賞・名カメラマン賞・取材賞  
 ・タイトル賞・マンガ賞・マップ賞 他
- 14:50～15:00 閉会の言葉

第6回 『川と緑を考える 子ども会議』開催までの手順



↓

⑤実行委員会（諸準備）

11月

⑥実行委員会（諸準備）

子ども会議実施

⑦実行委員会（反省集約／礼状等）

形式的には多少の変化変遷があっても、骨子はほぼ変わらずに開催・運営してこることができた。

その骨子とは、一つは『子ども主体』ということであり、二つには、『実質的な調査活動を裏付け』として持って進めてきたということである。

子どもフェスティバル等各地の開催の例を見てきたところ、御膳立が大人、運営が大人の例が大半であった。私たちの子ども会議も、確かに規模が大きくなってきた関係で子どもの手を離れた企画になってきていることは事実である。しかし、中身をかなり頑固に守ってきていることから、前回の体験を生かして今回の運営の立て役者になれるというスタイルで、子ども主体は生かされている。

また、後者の実質的調査活動を背景として進めてきたということは、それが私たちにとっての最重要なものという意識、川で自分を、自らの課題を発見することが私たちの活動の全てであってよいとする意識を持続してきたということであって、子ども会議で訴える力を持つのもこれ故という認識でのぞんできたことを意味する。会議に参加者としてのぞみ、発表すれば済みとするのが一般の形であろう。が、私たちは、自分が主催者であり、聴衆に訴えるものがなければ不成功であると強く意識したことが、子ども会議を継続して開催させる力を生んだものと確信する。

私たちの調査活動と子ども会議での発表項目を示す。これは、子どもたちの問題意識の持ち方と、私自身が、子どもたちの調査にいかにか『訴える力』を生み出させたらよいか考えて悪戦苦闘した足跡でもある。（子どもの川認識過程のと符合している点にも着目されたい）

## 初期

## 水源調査と地域の歴史調べ

- 第1回 子ども会議での発表事項（町田宗久先生の指導協力）
- |             |                |
|-------------|----------------|
| ◎湧水調査       | ○大岡・帷子川のプランクトン |
| ◎古家調べ       | ○樹木調べ          |
| ◎入江川調査      | ○砂の粒子調査        |
| ◎川辺の住民の意識調査 | ○川辺の雑草調査       |
| ◎鶴見川沿いの地名研究 | ○学級園での栽培と観察    |
|             | ○学区と川辺の植物比較    |

- 学校内の樹木
- 野鳥観察
- 学区内の虫

**中期**

自分たちの生活の範囲からテーマを探す

**第2回 子ども会議での発表事項**

- ◎古家調査
- ◎鶴見川の雑草調査
- ◎鶴見川と流域の工場
- ◎ニツ池の生物
- 鶴見川の微生物(藻類)
- 都会の中の水辺調査
- いくつかの川を歩いて

**科学的に調査しよう**

**第3回 子ども会議での発表事項(小宮真弓先生の指導協力)**

- ◎鶴見川の水質汚濁(バケツ)
- ◎絵本づくり(工場調査)
- ◎鶴見川と大気との関連
- ◎古家調査
- ◎湧水調査
- ◎地名研究
- あきカン・あきビン拾い
- 矢上川調査記録
- 鶴見川の雑草調査
- 川歩きの報告
- 大岡川を考える

**第4回 子ども会議での発表事項**

- ◎鶴見川の水質
- ◎鶴見川と大気との関連調査
- ◎川を観る&川への思い
- ぼくらの秘密の場所

**現在**

初心に戻り 川を歩くことから始める  
すべてを総合的にとらえる

**第5回 子ども会議での発表事項**

- ◎川からの提言
  - ◎川歩きの印象
  - ◎私たちの町の昔さがし
- (小宮先生指導)

**第6回 子ども会議での発表予定事項**

- ◎入江川緊急レポート

プログラムにそって、運営の手法について述べる。

挨拶は、中心は発見団団長の趣旨説明である。しかし、企画案にあるように、大人の実行委員長への挨拶を最初に受けている。子ども会議に大人は不要とする意見が論が強いが、市の『さわやか運動』と連動していること、多額の出費をお願いしている手前、私はこのことにはこだわっていない。

趣旨説明は会場向けの『立派な挨拶』もさることながら、代表として、川に対する取組への誓いととらえ、自分の考えを明確にさせる場面として意思表示させている。

前半は、過去の子ども会議全て『研究発表』をさせている。ここにおいて、人々に対して『訴える』ことが重要であることは、さきにふれた。

発表が発見団だけならばそれは努力目標として可能である。だが、一般の発表者にそれを期待できない。従って、『質問』という形で、発表者に迫らせる。子ども会議ならずとも同様の方法を取っていると言われるかも知れない。本子ども会議の違うところは質問者を会議の中で多数養成することを意図していることである。事前にも、

理解の浅い子どもには 『その意味を再び問う』ことを義務付けてある。

進んだ子どもには 『研究の狙いが正しく河川の浄化や緑の保全に役立つものであるのかを問う』ことを徹底しておく。

また、発表者として質問された場合も、『まず、質問者の考えを問ひ、或は、他の人の意見を数名聞いた後答える』というように、広げていけるように予め仕組んであるのである。この面での子どもたちの能力は、確かに数年前の子どもの力量に及ぶものではないが、経験させることの大切さという意味からも、今後もこうした場面を設定して進めていく必要性を感じている。

助言者には『よこはまかわを考える会』のメンバーを中心にお願いしている。条件はしゃべらない人、子どもと共に考えていこうとする人。こうした会で助言者という肩書きが付くと、無理に責任を果たそうとする人が多い。子どもたちの話し合いを楽しむぐらいの人が最も子ども会議には似つかわしい。

また、参会者のなかには、自然保護団体の人もいて、稀には、自分の主義主張を述べたり、子どもの『間違いもある発表』を攻撃してやる気を失わせる者もある。こうした人達も、子ども会議の意味が分かって減ってきているが、大人の側でおさえさせなくとも、私は司会の子どもにその扱い処し方を教えて対処してきた。

昼休みの時間、初期には、同じ曲を別々に指導した子どもたちが、一同に会し、合唱できたら何と素晴らしいことかと考えて、合唱・合奏を行ってきた。自分たちの歌いたい曲を、人前で歌えた満足はあったにちがいない。私も、声を出させる、外の人の声を聞かせる方法の一貫として合唱指導してきたところから、続けようと考えたが、この発

展性を考えると、川との接点がなかなか見出せなかった。

発表の苦手な子どもにも、運営面、歌などの場面では活躍できるこうしたメリットは大きい。従って、発表・討論以外の場面をどうしても残しておきたかった。

子どもたちの発表・討論の様子を見てみると分かるが、子どもたちは雰囲気の中なかで劇を演じているのである。川で今何が起こっているか、その全部を知らなくても、自分の目で見てきたことを『川の全て』と考えて熱中しているのである。ならば、最初から劇を演じさせてみたらどうかということをお願いして実施することとした。

第4回の子ども会議では、『市民グラフ』に掲載されていた『昔の下鉄村にあった本当の話』を脚本化して上演した。会場の様子、緑区での会議ということ配慮して、題材は区内から、見る人間く人の別なく会場全体を使ってが、私の工夫した点である。

これは歌と違い、見る人にとっても退屈させないものであり、何より、演じた者にとっては、語る言葉がインパクトをもって、教育的効果が大である。発表者が、発表することによって、その言に規制されることはある。『ごみを捨てないようにしましょう』と人前で叫んだ人間が、会場を出た途端、無意識にごみを捨てることはまずない。劇は自分でない人間を演じることで、自分の潜在している精神を目覚めさせ、自分の行動を明確に意識させるものである。

第6回は『大多摩川大発見団VS鶴見川子ども発見団』を上演した。より日常的に、分かってほしい川の問題をテーマにして劇化した。そして、練習も出来るだけ少ない回数で消化すること、観客も劇に加えていくことを念頭に仕掛けてみた。

劇の成功不成功は、私の力量の問題もあって、如何ともし難いが、方向としては面白く継続して進めていきたいと考えている。

後半の目玉は、過去には『分科会』であった。独り一人をばらばらにして、少ない人数の中なかで討論させるのである。5つも分科会を作ると、司会や記録多くの子どもに役が当たる。難点は、テーマである。対立する意見がぶつかり合うようなもの、例えば、『小さな自然を守るにはどうしたら良いのか』—『小さな自然より大きい自然破壊が急務』『小さな自然を見失っている人間にどうして大きな自然に目が向くのか』、こうしたやりとりは熱気あふれる討論が進行する。しかし、『川歩きの体験を語りあおう』となると、話し合いの接点はなかなか見出せるものではない。

分科会はそれなりの長所もあったが、公会堂開催となると、条件は全員で何かをといことになる。大人による講演会—これは子ども会議の子どものエネルギーを発散させる方には当然作用せず、会の発展性のうえでも何等効果を期待できるものではなかった。

そこで考えたのが『大討論会』（川の将来は一体どうなるのだろうか）である。ここには、善玉・悪玉の二人が登場する。この二人が、観客に誘いかけ、味方を増やしていく。結局は、悪玉が折れるというところで幕になるという、ストーリーはその場の流れで作っていくという、きわめて雑、冒険的試みであったが、これはかなり成功した



といえるのではないかと思う。この方法は、2度繰り返して実施したが、実質的勝利をおさめるのは、決まって悪玉『川の将来は、人々の努力にかかわらず、楽観的な方向に改善されない』である。善玉は、如何に正しい論理を持とうとも、川の現状を前にして、具体的な証拠を突き付けられてはお手上げである。このようにして、私たちが立場を代えて見るとき、違った事実・これまで発見できなかった事実が見えるということである。昼食時に劇を試みながら、次の場面でもまた、ノン・フィクション的要素を素材にした劇を演じさせたのである。

第6回では、外国人を呼び、世界の川から鶴見川を見させるという中で、また、大いに遊ばせてみようと考えているがどうであろうか。

プログラムの次に予定しているのが、鶴見川新聞表彰式である。子ども会議が発見団のみであったときも、なかば強制して集めたのが150名である。公会堂という大きな容器に100名そこそこでは申し訳が立たない。また、流域の人々に対する啓蒙活動という目的にも適合するものではない。

そこで、啓蒙と人集めの手段として考えたのが、初期には標語コンクールであった。第3回から大勢の参加者を得た秘訣は、実に河川に関する標語コンクールにあった。

港北区	配布数	4500枚	回収数	1500枚
緑区	配布数	7000枚	回収数	2500枚(?)

区役所の調整係の強力なバックアップを受けて実施された標語コンクールは、子ども会議の収穫以上に、個人・家庭で川に関する話題を引き起こしたにちがいない。港北で選出された優秀な標語を、次の会議のテーマにするなどという方法で、ある程度は効果を上げたと言って良い。しかし、この膨大な回収された作品の扱いについては、かなり難しい面があった。リストづくり・優秀作の選出上の問題(模倣の問題・字数が少ないために比較が難しい・言葉の遊び的要素が強い)など、2度ほど続けると、この熱も冷めてしまった。

次に登場させたのが新聞コンクールである。鶴見区を中心に、鶴見川流域の小中学校に用紙を配布したところ、応募作品数746点、応募総人数1474名という盛況であった。朝日学生新聞社の支援にプラスして、新聞は標語に倍するメリットがあった。

新聞社の応援は、当日配布の新聞に掲載の榮譽を子どもたちに与え、今回ならずとも次回を狙う気持ちを子どもたちに起こさせた。標語以上の素晴らしきとは、応募する子どもたちの河川に対する考え方が明確に紙面に記されていることである。大討論会の席上でも、応募者の中からきちんとした意見表明がなされていた。また、作品を並べたとき、地域性一河川との関わりりの深淺がはっきりとした形で見る事が可能であった。さらに、子ども会議を鶴見川流域の区が持ち回って行うことの意味を『鶴見川新聞』が、まとまりのシンボルとして機能したということである。標語は河川や緑に関するものといっても、とらえどころのない多様性を含んでいる。その点、『鶴見川新聞』は、地域

が内容をある程度限定するといえども、それ故、ここ（新聞・子ども会議）からアピールする度合いも大きいものと思われる。

このほか、『鶴見川を校歌』に入れた学校による『スクールソング・フェア』など、是非試みたいことの一つである。

閉会后、鶴見川の川辺で『アピールの採択』を行ったり、会の意見をまとめ『市に陳情書』を提出したことがあった。また、ロビーで、自分の住所を書いた葉書を、会場で知りあっていた友達に手渡し、後日、自分の感想を書き加えたりして、相手に送り返すという『葉書の交換（20%達成）』なども試みた。その場だけにしたくないという意図で実施したのである。

以上がこれまで継続して実施してきた子ども会議の方法論である。私は、子どもたちが前面に立って進められるような会議を成立させられるなら、形式は問わない。敢えてこのようにせよというものがあるのなら、子どもたちが体験する、発見する、学ぶという側面をよく考え、大人たちが子どもたちを正当に理解し、子どもたち自らが活動できる場を多く作ってほしいということである。

『金は出すが、口は出さない』という、役所としては発想を180度転換するような形で、『子ども自身で運営される会議だから混乱も可』として進めることができた。役所としての知恵ではなく、大人として子どもたちを見守ってくれている温かい目に感謝したいと思う。

長々と子ども学概論などと銘打って、川辺で観察した子どもたちの様子を、ある程度整理して書き記してみた。子どもノートや実際の研究発表などうまく配置して書き進めたいと思っはいたが、第6回子ども会議にむけての準備で時間が足りないのと、まだまだ現象面の認識が不足して、それもかなわなかった。

ここに、子ども学概論の『草稿』程度に言を弱めて、提示する次第である。

1990. 8. 4 記す

(参 考)

今日の課題に迫る水問題のとらえ(メモ)

1987. 7. 25

時代・形態	基本となった政策・取り組み方	考え方・自然観及び結果
~江戸期 農村社会型	☆治水・利水策→低水工事 ①舟運の便を図る ②農業用水の確保 →流量安定・河道固定 →治山=水害防護林・貯水 →砂防=浚渫 →覆堤・乗越堤	◎自然と人間がどう調和して生きるかが課題 ・水の流路の全体で水と接した生活 ・はん藍を予定した生活(恐ろしさの認識) 《土地利用・水利用・上流の緑》これらを統合して、生きている川とどう付き合うかを決定 ◎水論の横行 ・農民に慣行水利権を認める 水の配分を巡る争い 《土地と水に縛られた人間像》
	☆紀州流治水策→高水工事 ・新田開発と治水をセット	◎土地と水→養蚕・養蚕にとって利殖の対象
明治期~ 工業社会型	☆治水3法(河川・森林・砂防法) 河川法(明29)→高水工事 ①水害対策優先 ②水利権の決定 ③国家の水支配の法制化  ①計画高水流量の決定 ②川幅確保 ③川床の掘削 ④連続堤防・かさ上げ ⑤放水路掘削	◎人工の構築物=堤防に安全を託す ・洪水の一切は川で処理する ◎土地利用の分業化(目的的场所でのみ接する) ・上流~下流 産業による水取り台駈 ・下流域に人口と富の集中 土地の生産性が問題 ◎川の無機化 ・人と川を引き離す ・科学技術の通信→川の施設化 ・自然機能への不信感→川の中の自然の解体 →緑全体の減少
高度成長期 構造的 内在的 問題多発 現象型	☆都市化現象(別紙も参照) ①下流域重点策 →上中下分断政策 ②行政の分業化 ③機械と款式による対策  →水資源の不足 →水害の激化 →自然の破壊  →治水の考え	◎都市河川の掃きだめ化(総浪費の道) ・排水の質→不要な氾の掃きだめ(下水道) →川の暗きょ化 ・家畜排水 自分たちが汚しているという意識の喪失 ◎自己都合で選択の思想 ・自然を恣意的に加工する →自然と人との隔絶・自然の破壊 ・内向的河川思考の限界

## 子どもの川認識の過程

- 子どもを組織化する方法をさぐる

川への働きかけ	子どもの認識レベル
・水辺環境の喪失→川離れ 河川観 ○蛇口文化 ○河川管理の発想	○川に近付いてはいけない(高い堤防・フェンス) ○川は汚い。掃きだめ。(下水道化)
川を歩く	川に気付く ○川は汚い。臭い。(事実認識) ○色々の形の橋・同じようなコンクリート護岸 ○汚い川に魚(コイ)が泳いでいる ◎水源があって川は流れてくる ◎川は一本ではない。たくさんの支流がある ◎(外見として)すべてが汚いとは言えない ◎なぜフェンスがあるのか ◎なぜ人は汚い川に疑問をもたないのか
本当の川を矢口する(川の魅力) ○線から面(流域)へ ○毎日対面する川の顔 ・生活に位置付けられた川 ・研究の対象としての川 ○遊べる川(水辺に近付く) ○洪水のある川 ○人々の生活を知る (人々とのふれあい) ○美しい自然の川	課題・問題意識のもてる川・発見に値する川 ◎流域意識 ・多くの湧水が川を作っているのだ ・流域住民の生活を支えてきた川 ・流域住民・その町には個々の歴史がある ◎自然に対する意識 ・川の長さ自力走破の限界 ・自然探求の興味関心 湧水、水源、地名、樹木、雑草、砂の粒子、水質、野鳥等の調査 その変化、分布 ・一木一草にも名前がある ・様々な川の顔への興味関心 恐ろしい洪水の川 水不足の川 他(地方、外国)の川の姿 ・町の風景は、川を中心に成り立っている ◎記録の重要性に対する認識 ・調査記録の必要性の自覚 ・詩や文章表現による川のとらえ
他者との連携 拠点から川を見る	変革の主体者としての意識 ◎「私の川」意識 ・郷土・住民意識に直結する川 思い出の持てる川 水辺におりるのは自己責任 固有名詞としての川 ・生きている川という意識(生物全体を見る目) ・常に関心のある川 水防意識 自分は川を汚さない ◎発見団としての組織的活動の意味の認識 ・研究、子ども会議の目的意識及びその方法 ・子どもの独自性、柔軟な発想での川への取り組み ◎水と緑等環境全体への認識 ・川は私たちの問題 古い道、古家を残そう 斜面緑地を守ろう 水辺を作ろう 水源、湧水を守ろう 小さな緑を守ろう 川を埋め立てることは許されない

## II 都市河川の学習効果

—よみがえる水辺で野鳥や水質を調べて—

松 下 希 一

横浜市立帷子小学校

## 1. はじめに

本校は、横浜市のほぼ中心で、横浜駅から西へ約2km相鉄線の星川駅の近くにある。学校の周辺は、市街地で、マンション、団地、ビジネスパーク等の高いビルに囲まれていて緑が少ない。

学校の脇をコンクリートの垂直な護岸でできた帷子川が流れている。

この川は、昭和40年代には「死の川帷子川」と言われていた。周囲の工場から流れ出る排水のために、悪臭を放ちながらどす黒い流れを横浜港へ注いでいた。さらに有害な重金属も検出されていた。

その後、公害に対する規制が強化され、染色、化学工場等が移転した。下水道施設も普及が進み、水質は見違えるほどきれいになって来た。

さらに、ここは海にも近いため、潮の満ち引きがあり、ほんのわずかに干潟もできる。鳥たちも集まりだして来て都市の中のオアシスになってきている。

しかし地域の人たちの中には、昔のイメージが強く残っていて、「あのくさい帷子川」と表現されてしまうことが多い。

## 2. 活動の経過

昭和63年度5月よりこの年に転勤して来た教員が星川駅から帷子小学校間で野鳥観察をし、記録をとり始めた。担任している5年生のクラスでも野鳥観察を始める。

10月からその中で特に熱心な子供たちが毎朝観察を始め担任と代わって記録をつけ始めた。

平成元年度からは、ウオッチングクラブが発足し、全校に広まって来た。

平成2年度になり、初めから関わっていて、特に熱心であった子供たちは、3月に卒業したが後輩に受け継がれ、今も毎朝の観察は続けられている。9月からは、毎週金曜日に水質の調査も位置づけられて来た。

都市の中にあるオアシスに訪れる野鳥たちの記録や水質の変化の様子を調べ続け、訪れて来る生物たちを保護するとともに、よみがえって来つつある帷子川の存在を近くの人たちに紹介して来ている。

### 3. 観察された鳥たち

学校周辺（帷子川）で、49種類記録した。（50音順）

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1. アオサギ     | 26. スズメ     |
| 2. アカハラ     | 27. セグロカモメ  |
| 3. イソシギ     | 28. セグロセキレイ |
| 4. イソヒヨドリ   | 29. ソリハシシギ  |
| 5. イワツバメ    | 30. タシギ     |
| 6. ウグイス     | 31. タヒバリ    |
| 7. ウミネコ     | 32. チュウサギ   |
| 8. オシドリ     | 33. ツバメ     |
| 9. オナガ      | 34. ツグミ     |
| 10. オナガガモ   | 35. トビ      |
| 11. カイツブリ   | 36. ハクセキレイ  |
| 12. カルガモ    | 37. ハシブトガラス |
| 13. カワウ     | 38. ハシボソガラス |
| 14. カワセミ    | 39. ヒドリガモ   |
| 15. カワラヒワ   | 40. ヒバリ     |
| 16. キアシシギ   | 41. ヒヨドリ    |
| 17. キジバト    | 42. ビンズイ    |
| 18. キセキレイ   | 43. マガモ     |
| 19. コガモ     | 44. ムクドリ    |
| 20. コサギ     | 45. メジロ     |
| 21. コシアカツバメ | 46. モズ      |
| 22. コチドリ    | 47. ユリカモメ   |
| 23. ゴイサギ    | 48. (アイガモ)  |
| 24. シジュウカラ  | 49. (ドバト)   |
| 25. ジョウビタキ  |             |

## 4. 活動内容

### (1) 朝の活動

始業前に学校周辺の帷子川で観察している。5年生の2人が毎日行っていて、水質調査のある金曜はさらに4人ほど手伝っている。通勤者が多く通る橋の上で、双眼鏡をかまえたり採水したりしていると、たくさんの人々の視線を受ける。中には興味を持って尋ねて来る人もいる。調べたことは、ホワイトボードに書いて廊下に掲示している。さらに月毎に平均を出し、新聞にして配っている。

水質調査の項目は、水温、(気温)、比重、pH、COD、アンモニア、電気伝導度等である。

### (2) クラブの時間の活動

今年度からは、上からの野鳥観察だけでなく、縄ばしごを掛けて下におり、岸を歩いて観察したりして、さらに水辺に近づいた活動を多く取り入れて来ている。

下に降りると、鳥たちには警戒され観察しにくくなってしまいが、足型を石膏で取ることができたり、鳥と同じ目の高さで川を見ることができた。

さらに子供たちは、飛び跳ねるバックを追いかけたり、稚魚の群れを見つけたりして喜んでいて。他のクラブの子供たちは、憧れの「帷子川の水辺」に、降りているウオッチングクラブを見てフェンスにしがみついて声をかけてきていた。

魚類としては、ボラ、コイ、キンギョ、ヒメダカ、フナ等を観察することができた。市の公害対策局の調査ではこのすぐ近くでウナギを採取し新聞で紹介された。

2学期より土曜日の午後にも集まり、調査活動のまとめをしたり、公園予定地の探検をしたりしている。

### (3) 上流調査

水質と鳥たちの様子を比べたり、上流部の様子が知りたいという願いをかなえるために7月の終わりに上流調査に出かけた。

10時間近く歩いた。観察された鳥は、種類、数ともに帷子小周辺が一番多かった。水質検査の結果を見ても学校の辺りが最もきれいであった。

ここがきれいな理由は、上流部ではまだ下水道普及率が低いこと、ここでは、潮の影響を受けて水の出入りが多いことではないだろうか。

### (4) 広報活動

観察している鳥や水の様子は、校内放送や校内新聞だけでなく、「公害セミナー」「川と緑を考える子ども会議」等の発表会にも毎年参加して発表して来ている。

新聞作りでは、「バードウオッチング新聞」「カルガモだより」等担当しているグループ毎に競い合



って作り上げている。

区の広報紙や新聞社、テレビ局の取材を数多く受け帷子川に来る鳥たちの存在や活動の様子が大きく紹介されて来た。

#### (5) 保護活動

傷ついた鳥たちを保護したり、死体は記録して手厚く葬ったりしている。

昨年は川の水の着色や魚の大量死をいち早く通報すると共に調査にも協力してきた。

昨年度は卒業製作として60個の巣箱を校内や川沿いにつけて来た。

今年の6月には校内に、生物育成観察用小川が完成した。コンクリートの上に荒木田土を張り、水生植物や小動物が生育し易いように作られた。この作業には5年生が学年全体で手伝った。夏にはたくさんのヤゴの羽化が確認された。

#### (6) まとめ

49種類の鳥たちの観察記録や水質調査は、「死の川帷子川」が確実によみがえって来ていることを証明できる。

垂直なコンクリート護岸で遠ざけられている都市河川帷子川も、高層住宅に囲まれて生活している私たちにとっては、オアシスである。

少しずつ高まってきてはいるが、帷子川は、まだ周辺の人たちに十分に親しまれてはいない。これからも活動を続け、見近なところから環境を大事にしていける子供たちを育て、地域の人たちの関心も一層高めて行きたい。

## 5. 川の学習効果について

### (1) 川に接しての子供の変化

私たちは、都市河川で活動してきている。近年多くの都市河川では、臭い汚いの代名詞にもなってきている。この地域でも臭い汚いと感じている人は多い。

川への関心が薄い子供達は、夏水が少ない頃に見られた水綿や悪臭、白いビニールゴミのイメージがどうしても強く、鳥を見てもみんなスズメかドバトに見えてしまっているようだ。

だが、野鳥観察などを通して川によく接してきた子供たちは、「きれい」という意識を強く持っている。毎日鳥たちが水浴びをしたり、水の中の魚を取って食べているのを見ていると、自分も一緒に生活しているように思えてくる。

休み時間に川沿いのフェンスに子供たちが腰掛けて水鳥がくるのを待ちかまえている姿はまるで親鳥を待っているツバメの雛のようである。

雨上がりの朝の観察では、川辺全体がひかり輝いているところに出会うことができる。

都市河川の高い護岸は、子供たちにとって適度な障害となり、縄ばしごをつかっての上がり降り自体が楽しい活動になっている。

「川底」に降りて見た景色は、上から眺めるのと大変違い、多くの子供たちの心を引き付ける。子供たちはどンドン流れの方に近づいて行く。

陣ヶ下溪谷で行った探検では、崖や岩、倒木などを次々に乗り越え上流へと吸い込まれて行った。学校ではなかなか友達と適応できない者も、協力しなければ乗り越えることができない崖を目の前にして、優しく仲間達に手を差し伸べていた。

帷子小付近の帷子川では、潮の満ち引きの影響も受け、川は、刻々姿を変える。鳥や魚などの小動物もたくさん集まり、「観察」し始めた子供たちの気持ちを引き付けている。

子供たちに聞いてみると活動を深めるにつれ「どうでもいい帷子川」が「心を引かれる川、鳥の宝庫の川」と変わってきているようだ。

## (2) 各地の発表会に参加して

ほとんどの発表で、希望者を全員参加させ発表のチャンスを与えた。中には日頃の活動にはあまり熱心に参加していなかったり、先輩のやって来たことをそのまま言わなくてはならない者もいた。しかし発表の練習を繰り返すうちに、スライドから鳥の名前を覚えたりして自覚が高まって行った。熱心に観察している5年生に対抗して6年生は自分のフィールドを開拓して観察を始めた。

毎年参加している川と緑を考える子ども会議では、他のグループからするどい質問や意見を受けることもあった。子どもとしての自尊心もあり、力を込めて返答していた。子供たちの出番がたくさん用意されている子ども会議では、マイク（会が盛り上がるように考えてインタビューする）係から受付、照明係までも分担され、一人一人が川と緑を護るために参加しているという使命感を満足させることができた。

県や環境庁が開いている（野生生物）保護実績発表会では、順位をつけられてしまうために、きびしい練習を行ったが、最優秀賞を受賞でき、自分達のやってきた保護活動に対してさらに大きなプライドを持つことができるようになった。

## (3) 川での活動で気をつける点（都市河川）

コンクリートの垂直を護岸でできている川に降りて活動するときには、縄ばしごを用意したり、近くで大人が見守る必要がある。洪水のときの川のイメージを強く持っている大人達は、子供たちが川に降りているところを見かけると大変心配してしまう。

大人がついて活動しているときも、活動の意義をよく理解してもらえない場合もある。そこで清掃活動も取り入れてみる。子供たちがきれいにしている姿を見て、不快に感じる大人はいなくなる。

## (参 考)

## 活 動 の 経 過

年	月	活 動 他	
88	5	帷子川（星川駅～帷子小）で野鳥観察を始める。	
	6	西谷ほたるの里守る会の「ホタルを見る会」に参加する。	
	10	子供たちが朝の野鳥観察を始める。（星川駅～天王町団地） カワセミがたびたび出現する。	
	11	第12回公害セミナーで発表する。 帷子川で野鳥30種類確認する。 保土ヶ谷区役所の写真コンクールに「バードウォッチング新聞」を応募して優秀賞を受賞する。 陣ヶ下溪谷に探検に行く。 今井川上流バードウォッチングをする。 保土ヶ谷公園でバードウォッチングをする。	
	12	行徳野鳥観察舎探鳥会に参加する。 三溪園でバードウォッチングをする。 ユリカモメに給餌を始める。 横浜自然観察の森でバードウォッチングをする。 「カルガモだより」No.1を発行する。	
	89	1	毎日の観察コースになっている団地の緑地でかすみ網を発見し警察に届ける。 相模川探鳥会に参加する。 こども自然公園でバードウォッチングをする。
		2	第4回川を考える子ども会議（港北区）で発表する。 三保市民の森でバードウォッチングをする。 鶴見川でバードウォッチングをする。
		3	帷子川シンポジウム（西区）で発表する。
		5	よこはまかわをを考える会ニュースに「帷子川と鳥たち」を連載し始める。 横浜自然観察の森探鳥会に参加する。 小机でバードウォッチングをする。
		6	帷子川に親しむ会の協力で「帷子川野鳥観察ボード」できる。 小机でバードウォッチングをする。 西谷ほたるの里守る会の「ホタルを見る会」に参加する。 水質調査を始める。（6月～9月）谷田
		7	帷子川に親しむ会制作のビデオ「帷子川風景」の撮影に協力し陣ヶ下溪谷に探検に行く。

	8	<p>神奈川県鳥獣保護実績発表大会に出席し「優秀賞を受賞」する。</p> <p>帷子川の赤い着色を発見し公害対策局に通報した。発生源を見つけて指導してもらう。</p> <p>横浜自然観察の森でバードウォッチングをする。</p>
	9	横浜自然観察の森探鳥会に参加する。
89	10	<p>カワセミが1年ぶりに出現する。</p> <p>明治神宮探鳥会に参加する。</p> <p>ハクセキレイの寝ぐら（横浜駅東口）を発見する。</p> <p>横浜自然観察の森探鳥会に参加する。</p>
	11	<p>ユリカモメの餌やりを始める。</p> <p>相模川でバードウォッチングをする。</p> <p>大井野鳥公園探鳥会に参加する。</p> <p>今井川でボラやハゼが数千匹死亡。公害対策局に届け調査に協力する。（原因不明だった。）</p> <p>保土ヶ谷の鳥に帷子川のアイドル「カルガモ」が選ばれた。</p>
	12	<p>第6回横浜水辺賞（よこはまかわを考える会）を受賞する。</p> <p>神奈川新聞（ひびき欄）にクラブ活動の様子や受賞について紹介される。</p> <p>多摩川でバードウォッチングをする。13人参加。</p> <p>第13回公害セミナーに参加し発表する。</p>
90	1	<p>横浜自然観察の森探鳥会に参加する。</p> <p>衰弱したキジバトを保護する。野毛山動物園に連れて行った。</p> <p>ゴイサギの幼鳥の死体を川から拾い上げ埋葬する。死因は不明。</p>
	2	<p>広報よこはま（保土ヶ谷版）にクラブ活動の様子が紹介される。</p> <p>「カルガモだより」No.30発行する。</p> <p>校内や天王町団地、保土ヶ谷公会堂前に巣箱を60個設置する。</p> <p>東京新聞にクラブ活動の様子（巣箱掛け）が紹介される。</p> <p>横浜自然観察の森探鳥会に参加する。</p>
	3	<p>校内のクラブ発表会で活動の様子を紹介。</p> <p>第1代バードウォッチンググループ卒業する。</p>
	4	<p>第2代バードウォッチンググループ誕生する。</p> <p>朝の観察復活する。（西山、中村）よこはまかわを考える会ニュース連載担当も2代目に引き継がれる。（布施→和気）</p>
	5	<p>なわばしごを使って川へ降りての活動をクラブの時間に取り入れ始める。（鳥の足形を取った。）</p> <p>テレビ神奈川の取材を受ける。「神奈川リポート12日に放映」昨年度設置した巣箱でシジュウカラの繁殖を確認した。（親が逃げてしまい全滅させてしまった。）</p>

	6	<p>野生生物育成観察用水路を校内に設置した。水路内に荒木田土を敷く作業を子供たちが手伝った。</p> <p>西谷ほたるの里守る会の「ホタルを見る会」に参加する。</p> <p>桜ヶ丘緑地に探検に行った。</p>
	7	<p>帷子川上流調査（水質、生物）を実施した。（2回）</p> <p>教育よこはまに活動の様子が掲載される。</p>
	8	<p>神奈川県鳥獣保護実績発表大会に参加し発表する。（最優秀賞を受賞し、県の代表に選ばれた。）</p> <p>水路に水草や小動物を入れた。OBも協力した。大久保、布施毎週金曜日に帷子川の水質調査を開始した。（協力末松、山本、吉田）</p>
90	9	<p>テレビ神奈川の取材を受ける。</p> <p>低、高学年向きに新聞（カルガモだより、バードウォッチング新聞）を発行し始める。</p>
	11	<p>川と緑を考える子ども会議（港北区役所）に参加する。</p> <p>OBも多数参加し協力する。</p> <p>横浜市公害対策局に帷子川の水質について質問に行く。</p> <p>神奈川新聞にふたたび活動の様子が紹介される。</p> <p>保土ヶ谷の自然展（保土ヶ谷区役所、市緑政局）で活動の様子を紹介する。</p> <p>上流調査に行く。コガモ、マガモ（鶴ヶ峰帷子川分水路近く）</p>
	12	<p>全国野生生物保護実績発表大会に参加発表し、最優秀賞（環境庁長官賞）を受賞する。</p> <p>環境セミナー（横浜市公害対策局）に参加し発表する。</p> <p>神奈川新聞、日本教育新聞で受賞の様子が紹介される。</p> <p>地域の方より励ましの手紙をもらいみんなで返事を書く。</p> <p>西谷浄水場に帷子川への放水量について問い合わせする。</p>
91	1	<p>4年生が朝の観察を開始した。（森野、川崎、本村）</p>
	2	<p>「私たちの自然」（日本鳥類保護連盟）で全国発表大会の様子が紹介される。</p> <p>上流調査でカワセミを発見する。（西谷学校橋近く）</p> <p>コガモ、マガモ（鶴ヶ峰分水路近く）</p> <p>校内に「帷子川と鳥」のコーナーができる。（2ヶ所）</p> <p>保土ヶ谷図書館の講演会「保土ヶ谷の自然」で活動の様子を紹介する。</p>
	3	<p>校内のクラブ発表会で活動の様子を紹介する。</p> <p>東京港野鳥公園にバードウォッチングに行く。</p>
	4	<p>「総合教育技術」（小学館）で活動の様子が紹介される。</p>



# K A U A O A O I R G M D Y R カルカモだより

権子小 和気 西山 中村  
本村 森野 川崎

カラスがウナギを  
運んできたよ!!

2月22日、権子小の校舎の3階から4階へ行く階段の  
みじり場のまどのさんに、さ、とひからびたウナギが置  
いてありました。谷セキぐらいで、どじょうかと思、たのてすが  
官君によりウナギと判明  
現場も見人によれば、そのウナギ、ハシフトガラスが  
置いて行、たとのこ、

## 再び上流調査

今回の上流調査は、本村君、森野君、川崎君の四年生三  
人が行ってきました。  
今回は、大きな収穫がありました。  
まず、鶴ヶ峰分水路付近で、コカモとマカモを見ました  
と。それに、西谷学校橋付近で、今年はやや少い  
たカワセミも見見。  
四年生三人のかみ柄でした。

## ウエッチェンクラフの 掲示板誕生

権子小のこのFのまの、なんと  
ウエッチェンクラフ専用の掲示板  
ができました。うれし  
休土ヶ谷の自然展に  
出したパネルや、県の自然保護課  
のお願いたいだposter、生徒が書  
いた愛鳥posterなどを、全校のみ  
んごに見てもらっています。

榎下先生は、(2)に保土ヶ谷図書館  
の講話会に招かれ、休土ヶ谷の自然  
というテーマでお話のこととPR  
してきてくれたそうです。  
年輩の方が多かったようですが、み  
んなに喜ばれ、子どしたうかんぱれと  
アンケートに書かれたと自慢して  
いました。

3月1日のクラフ発表会がありました。  
来年度はどんな報告が  
入ってきますか。  
かめいしが、くろいひな  
榎下

## 朝のウエッチェンクラフだより

2月の鳥達

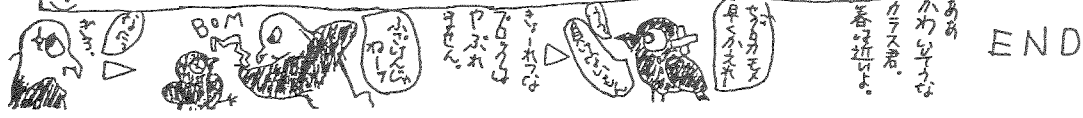
2月の権子川

- カルガモ
- オナガガモ
- ユリカモメ
- セグロカモメ
- ハクセキレイ
- セグロセキレイ
- キセキレイ
- ヒヨドリ
- ハシボソガラス
- ムクドリ
- コサギ
- シジュウカラ
- ハシブトガラス
- キジバト
- メジロ
- ツグミ
- タヒバリ

カモメ(大統領榎下  
セグロカモメ甲いるユ  
リカモメ取が権子川に  
侵食してからはやくも  
二ヶ月、皆さんは武力  
行使をしたとスバリ思  
つたでしょう。  
しかし、カルガモ田  
大統領森野氏は陸伏、  
結局、ユリカモメ軍は  
なーんの苦労も無く占  
領出来たのです。  
又、ユリカモメ軍の  
侵食によって食料が不  
足し、(ユリカモメに  
捕取りされる)カルガ  
モ一羽パンのみみ一切  
れと言う有様で、カル  
ガモとうしの争いが大  
変多くなっています。  
西山

オナガガモはそろそろ結婚相手を見  
つけたようです。  
中村君の観察によると、オスが飛び  
立ったあとにメスがはいそいで追いかけ  
て行く姿が見られるそうです。

オナガガモのオス1人との見持を毛フ  
かむので大変な羽を毛ですうといわれま  
す。

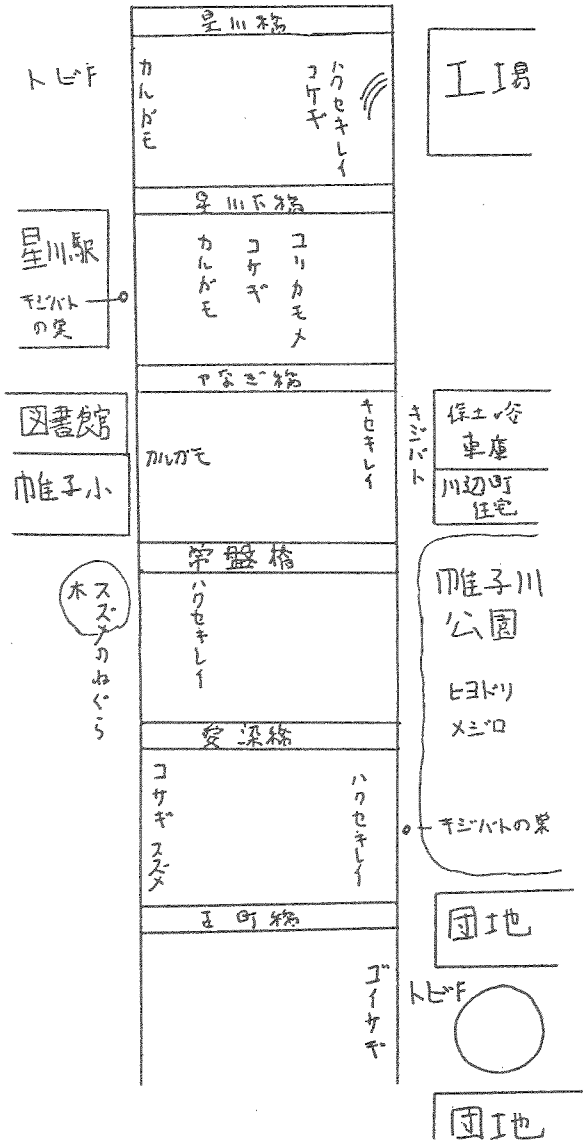


# — 観察のてびき —



発行・フクロウ

No.2



- ・ カル ガモは、100羽前後います
- ・ ムシカモメは、まだ5羽前後です  
モシカモメを、2. 伊間を呼んできてもらおう

## こゝから 唯子川に飛来する冬鳥 (練鳥)

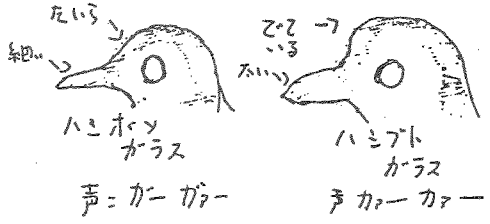
オトガガモ ・ コガモ ・ マカモ ・ セウロガモ  
タヒバリ、セウロセキレイ、ムシウビタキ、ツミ  
アカハラ、イッヒヨドリ  
5年の冬によくいた鳥です。

## ねぐら について

- ・ 天王町スカイハイツの木の所に スズメが  
夕方集まってきて、よく鳴いています。  
見てみて下さい。
- ・ 底の間、唯子川にいた ハクセキレイは、  
横浜三郷東口に集まって来ています。
- ・ 星川駅の近くや団地の公園などに、鳥を  
かまを作ると、時々鳥あつちかこさないように  
観察しましょう。

## カラス の見分け

よくいる カラスにも 2種いて、  
よく見ると、ちがう所があります。  
見分けてみて下さい。



団地の上や、星川SFビルの上の辺を  
よくトビが飛んでいます。よく飛ぶ方  
などを観察しましょう。そして尾を見て  
みましょう。

← しみせんの  
ハチ形の尾  
(長め)



# 第25回全国野生生物保護実績発表大会



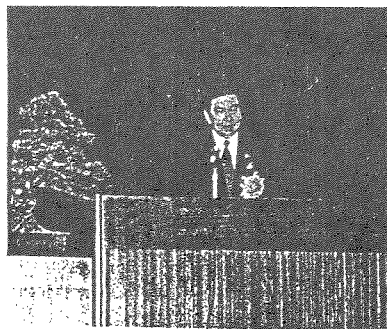
12月6日、環境庁・連盟主催、文部省・林野庁後援の「第25回全国野生生物保護実績発表大会」が、東京霞が関の中央合同庁舎講堂において開催されました。

この大会は、小・中・高等学校、一般の団体等が日頃行なっている野生生物に対する保護活動の様子やその成果を具体的に発表するもので、出場

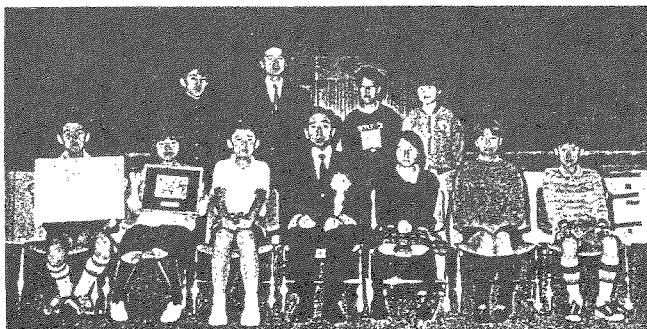
する団体は、各都道府県から中央に推せんされた中から環境庁・文部省・林野庁・日本鳥学会・山階鳥類研究所・全国愛鳥教育研究会・連盟等で構成されている選考委員会によって決定されます。

今回は小学校が7校、高等学校が1校、養護学校が1校、一般が1団体で、それぞれに以下の賞が贈られました。

<p><b>環境庁長官賞</b></p> <p>神奈川県 横浜市立帷子小学校 「都会のオアシス帷子川」</p> <p><b>文部大臣奨励賞</b></p> <p>埼玉県 熊谷市立久下小学校 「ムサシトミヨの絶滅を防ぐために」</p> <p>東京都 世田谷区立赤堤小学校 「都会の自然を守る愛鳥活動」</p> <p><b>林野庁長官賞</b></p> <p>愛知県 東栄町立粟代小学校 「野鳥の楽園『粟代っ子の森』」</p> <p>茨城県 荖崎町立荖崎第二小学校 「鳥とともだちに」</p>	<p><b>日本鳥類保護連盟会長賞</b></p> <p>沖縄県 沖縄県立美咲養護学校 「傷ついた野鳥に愛の手を」</p> <p><b>環境庁自然保護局長賞</b></p> <p>北海道 羽幌町立天売小学校 「オロロンの声ひびく自然豊かな島づくり」</p> <p>福島県 郡山ホテル愛好会 「ホテルの飛ぶ夏の夜をつくろう」</p> <p><b>日本鳥類保護連盟会長褒状</b></p> <p>栃木県 益子町立小宅小学校 「自然を知る活動を通して自然を大切に育てよう」</p> <p>千葉県 千葉県立土気高等学校 「開発途上にある地域(土気)における野鳥調査と愛鳥活動」</p>
--	--



挨拶する河野洋平連盟会長



環境庁長官賞を受賞した横浜市立帷子小学校  
安原正環境庁事務次官とうれしい記念撮影

# おめでとう！環境庁長官賞

## 神奈川県横浜市立帷子小学校

帷子小学校は横浜市のほぼ中心、横浜駅から西へ約2kmの相鉄線星川駅の近くにあります。周辺は市街地で、マンション、団地、ビジネスパーク等の高いビルに囲まれ、緑はほとんどないと言ってよいでしょう。

学校の脇をコンクリートの垂直な護岸でできた帷子川が流れています。この川は昭和40年代には「死の川帷子川」と言われていました。周囲の工場から流れ出る排水のために、悪臭を放ちながらどす黒い流れを横浜港へ注いでいたのです。有害な重金属も検出されました。

しかし、その後公害に対する規制が強化され、下水道施設も普及が進み、水質は見違えるほどきれいになってきました。海に近いため潮の満ち引きがあり、ほんのおずかですが干潟もできます。鳥たちも集まりだしてきて、今では都市の中のオアシスになってきています。

帷子小学校の主な活動は、この帷子川の水質調査と野鳥観察で、その記録は子供たちで作って



る新聞「カルガモだより」で紹介したり、子供たちが運営している「川と緑を考える子供会議」で発表しています。

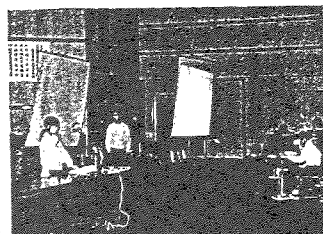
帷子川にやって来る野鳥の記録や川の水質の変化を調べながら、帷子川の自然を保護するとともに、地域の人たちによりみがえりつつあるオアシスの存在を紹介しています。



熊谷市立久下小学校



世田谷区立赤堤小学校



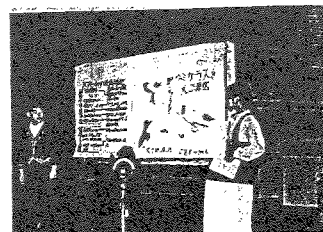
東栄町立粟代小学校



荏碓町立荏碓第二小学校



沖縄県立美咲養護学校



羽根町立天売小学校

## 帷子川について

☆西山 竜介☆ 5年生(現副部長)

みんなの頭の中に「帷子川」というのを思い浮かべて欲しい、たいていの人が、「臭い」「汚い」「危ない」などの表現をしてしまいがちだと思う。

しかし、人々はなぜこの様な表現の仕方をしてしまうのだろうか。

第一に、昭和40年代の、有毒な工業排水が流れ込むどす黒い流れの帷子川が、地域の人々の頭の中に強く残っていて、それがそのまま現在の帷子川の印象としてとらえられていること。

第二に、川底にあるヘドロやゴミなどが、帷子川は「きたない」と印象づけてしまう。第三に、帷子川兩岸を囲むコンクリートの護岸が、いかにも危険というように人々にとられてしまう、そして人と川とを遠ざけてしまい、帷子川の本物の姿が、みれなくなってしまったのかもしれない。

この様な理由から、人々は帷子川を「臭い」「汚い」「危ない」などと思ってしまうのではないだろうか。

◎

帷子川を見ていると何と気付くことはないだろうか、鳥がいる、そして虫も草花もある。

現在帷子川には、49種類もの鳥達が訪れてきている、何故これだけの鳥達が訪れてくるのだろうか。

毎日観察をしていると、川の水が増えたり減ったりしていることに気付くだろう、それは、この辺りは海に近い川でも潮の満ち引きが起こる、川の水が増えたり減ったりするのはこのためだ。

川の水が減った時、川の中に少しだが干潟ができる、干潟は外敵から襲われにくく、ときたま通行人からエサももらえるため好条件なのだ。

そしてまた、川自体の流れが緩やかなので、鳥達にとってはとても住みやすい場所なのだ。

この様なことから、まさに帷子川は都会のオアシスと言えるだろう。

◎

次に、帷子川の四季についてみてみることにしよう。

春、生き物達の活動の始まる季節。帷子川ではオナカガモ達が遠くのシベリアへ帰っていく、そして、オナカガモと入れ代わりに、カムチャッカと言う所から、ツバメ達がやってくる。

夏、帷子川の岸辺はたくさんの草でおおわれる。しかし、このころになると、鳥達の種類・数共に少なくなりませんが、ハクセキレイのチチン、チチン、と言う声をきくと、とても涼しい気分になる。

秋、春・夏は5羽位だったカルガモが急激に増え60羽位になる。

冬、この季節が帷子川の一年の中で一番にぎやかになる。代表的な鳥は百羽以上来るユリカモメやシベリアから来るオナカガモなどだ。

又、帷子川一番の人気者のカルガモは、90羽以上になる事がしょっちゅうだ。

この様に、帷子川は色々な顔を持っているが、みんなが「臭い」「汚い」と言うイメージを捨て去らないかぎり、本当の帷子川の顔は見れないと思う。

垂直なコンクリート護岸で遠ざけられている都市河川帷子川も、高層住宅に囲まれて生活している君達や、鳥達にとってはオアシスなのだ。

☆布施 剛☆ 中学1年（前ウオッチングクラブ部長）

横浜市の中央を帷子川は流れる。そのそばにぼくは住んでいる。なんとなく川に出かけてみる。帷子川はコンクリートで護岸されているが川岸には少し陸があり、水路というものより少しましである。

しかし流れる水はくさい。ぼくは友達と川の橋の上から鳥や水質を調べていた。帷子川のまわりはマンションやオフィス街だが50種類近い鳥を見ることができた。だがこれは川がきれいでも自然が多いわけでもなく、川の自然をへらし、人間を川にちかづけなくする防波堤や人間の出すゴミに鳥がたよっているだけなのである。それだけまわりの自然はへってきているのではないかと思う。

堤防の上から川を見おろす。今日もカルガモがユリカモメが外敵である人間とはなれ、静かにくらすしていた。鳥たちはこんな所で満足しているのだろうか。そんなことはないと思う。河川改修は鳥にも川にも人間にも決していいことではないと思う。

ぼくのいるあたりは、昔の海岸線のあったところでおのみちひきがある。川の水位が低い時、ぼくは友達と堤防をおりてみた。するといままでみてきた帷子川とはまったくちがう帷子川が見えた。上から見おろすのとは、ぜんぜんちがう、いなかの護岸されていない大きな川のような感じに近かった。土のかんしょく、同じ目の高さで見ると鳥、意外と種類の多い草花、ぼくはいつもカルガモがねている所にすわってみた。この川の流れも、太陽の光やずっと遠くの山波のようにぼくをなにか不思議な静かな気持ちにさせてくれるものがあるのだ。そう思った。しばらくすると少しくさいにおいがただよってきた。そして川のそばを通る人がナンダナンダ、ナンダあいつらは、というような目で見ていたのでぼくは堤防をよじのぼった。

この汚い川はそうかんたんにきれいにはならない。しかし、もっとこの川にちかずけたらと思う。くずれてしまった川とにんげんの関係を少しでもとりもどすことがこの川をきれいにするはじめになることだと思う。なわばしごを使い帷子小の仲間が川岸におりた。彼らにもいつもとなにかちがう帷子川見れたと思う。まだまだみすてたもんじゃない。そう感じたと思う。帷子川も近づいてみれば、まだなにか楽しめる川なのだ。ぼくらには美しい川とか景色とかを楽しむ権利があるのではないか。とにかく川を埋めて、その上に流したせせらぎより、ほんとの川の方がいいのである。見た目にはきれいに護岸した川より、そのままのかたちに近い川の方がいいのである。

川をまっすぐにして護岸をしてすぐそばに住むのは、人間にも川にもよくないことだ。だから洪水がおきて大きなひ害がでるのだ。

とにかく今、川に近づいてみるのが大切である。

ああ、日本中の川を源流と海とを結ぶまっすぐな水路にしないでほしい。

## 帷子川から学ぶ

☆谷田 康太☆ 中学1年

僕は今、どの様にかこうか悩んでいます。「帷子川と松下先生によって地球内に関心が向いたのは否定出来ない事実だし、外に目、心、頭が向いているのはかなり（オーバーか？）昔から変わっていない。」そう、その通りだ、と、自分で合づちを打っているうちに今、どの様にかこうかいきづまってしまうました。

帷子川と松下先生によって（ちょっとオーバーになったかな）地球内、特に自然科学の中でも生物に僕に関心が向いたのです。ただ関心が向いたのではなく、自分からやって行こう、と、言う気持ちを持ちました。そうは言ってもやはり昔から地球外に心があるので、今でもそちらがメインだし、これから本格的にやろうと思っているのもそちらですから、あくまでも趣味と言った所でしょうか。ともかく、僕にとって必要なものになりました。

帷子川と言えもう「鳥」と言う人もいるでしょう。それだけ鳥が多く来る様になったのはやはり環境が良くなったからでしょうか。地域の人も関心が有る様です。僕が見ても鳥たちも安心してのびのびと（はいきれないけれど）生活しています。本来自然とへだたせる様なコンクリートの岸も鳥達にとっての外敵を防いでいます。以前の某新聞の見出しの様に鳥の天国がこの帷子川のこのごく一部に完成されたのです。

この様に帷子川には鳥が多くいて、それだけではなく、小は細菌、微生物から、大は大形鳥類、ヒトにいたるまでの多くの生物が生活しています。これだけたくさんの生物がいるのに帷子小ではほとんどの目が鳥に向けられています。もっと、もっと広い範囲に目を向けてほしいものです。DNA、RNA、たんぱく質等についてもかんたんになら小学生のうちに教えた方がいいのではないのでしょうか。観察による知識だけでは足りないかもしれません。生物や命を教えるのなら生物と他の物体とのちがいを教えるべきだと思います。